

小金井市

No.22 遺跡

小金井本町住宅建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



2023・9

東京都埋蔵文化財センター

小金井市

No.22 遺跡

小金井本町住宅建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



2023・9

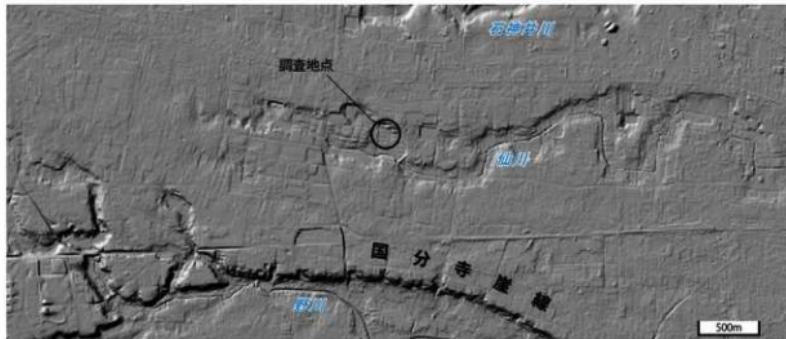
東京都埋蔵文化財センター

小金井市 No.22 遺跡の調査

小金井市 No.22 遺跡は、武蔵野台地の武蔵野面上の、仙川の源流域に位置します。遺跡範囲の大半が東京都住宅供給公社小金井本町住宅の敷地と重複しており、今回の調査は同住宅の建替事業に伴って実施されました。

小金井市 No.22 遺跡は現時点で市内で唯一確認されている、仙川流域の遺跡です。他の遺跡は全て国分寺崖線沿いの野川流域に位置しています。今回の調査は、小金井市 No.22 遺跡の第一次調査にあたり、同時に市内の仙川流域では初めての発掘本調査となりました。

調査地点周辺は谷地形で、発掘は谷底に近い位置で行われました。現在の仙川上流域は宅地造成時の改修によってコンクリート張りになっており、人工水路のような姿をしていますが、徐々に南へ流路を変更した多摩川の名残川です。調査地点内のローム土層の土壤分析の結果、約 3 万年前には川としての流れがあったようですが、約 2 万 6 千年～2 万 2 千年前には水量が減少し、谷が埋まり始めたことが分かりました。しかし、土層の状況などから、その後も季節的な湧水や地下水によって、長期にわたり水の影響を受けており、比較的低湿な環境であったと思われます。



遺跡周辺の地形

出典：国土地理院地理院地図陰影起伏図を元に作成



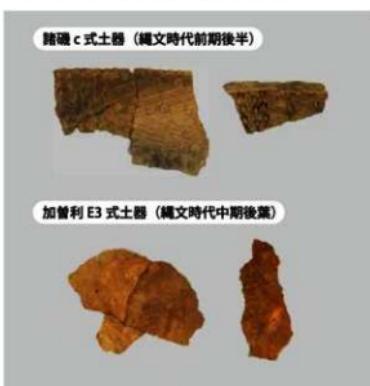
調査区内ローム層確認トレンチ断面（南から）

上：地形の起伏を陰影で表した図です。小金井市では国分寺崖線を境に段丘面が異なり、十数メートルの標高差があります。調査地点周辺は浅い谷状になっています。この谷は、かつて仙川によって形成されたものです。

左：調査地点のローム層の状況です。水の影響を受けしており、台地上のロームの堆積とは大きく異なります。線で囲った層は砂礫層で、かつての仙川の流路跡だと思われます。現在の地表面から約 3m の深さで確認されました。



縄文時代の土坑（SK01・02）（北西から）



上：縄文時代の土坑で、狩猟用の陥し穴だと思われます。写真上方の谷底部へわずかに傾斜し、陥し穴の長軸もそちらへ向けられています。今回の調査では壁際で2基確認されましたら、地形から見て調査区の外にも広がっている可能性があります。

左：今回の調査で出土した土器の一部です。見つかった土器は全部で2～4個体程度でした。小金井市内では、縄文時代前期の生活痕跡は少なく、今までに住居跡などの遺構は見つかっておらず、いくつかの遺跡で少量の土器が確認される程度です。今回出土した土器は、当時生活の中心だった野川流域だけでなく、仙川流域でも人々が活動していた痕跡として、貴重な成果となりました。

遺跡から出土した縄文土器

縄文時代については、土坑2基が確認され、縄文土器や石器などが出土しました。土坑は2基が横並びで見つかり、長軸を標高の低い谷底の方へ向けて作られていました。谷底に溜まった雨水や湧水に集まる動物を対象とした狩猟用の陥し穴だと推測されます。

出土した縄文土器の型式は大半が前期後葉（諸磯c式、約5,500年前）で、一部中期後葉（加曾利E式、約4,500年前）も含まれていました。土器は狭い範囲に集中し、異なる時期の土器が同じ位置・高さから出土していることから、谷の上で使用・廃棄されたものが、後世に谷の中へ流れ込んだものと思われます。よって、遺跡周囲の谷上の縁辺部や平坦部からも、縄文時代の遺構や遺物が発見される可能性があります。



近世以降の溝跡全景（南東から）



「貴井村全図 坂上」と調査地点

上：近世以降の溝跡の検出状況です。SD01が「小金井村境界通」に隣接している溝です。位置的にはSD02が境界通に該当しますが、道跡とする根拠が少なく、断定はできませんでした。図中央上に並んだ浅い溝は畝間溝で、SD01・02、つまり境界通と直行するように、そして小金井村分水と平行するように作られています。小金井村分水を基準に、耕作地の区画などが作られたと思われます。

左：明治前期に描かれた「貴井村全図 坂上」の調査地点周辺の図です。赤く描かれているのが道、青く描かれているのが川や水路です。調査区を斜めに横切るのが貴井村と小金井村の境にある「小金井村境界通」で、小金井村分水と直行する方向へ伸びています。

今回の調査では、近世・近代の遺構や遺物も発見されました。調査地点周辺を含む市内北部では、江戸時代の承応2年（1653）に玉川上水が開削され、その後、元禄9年（1696）頃に小金井村分水が許可されると、近隣一帯の新田開発が始まります。今回の調査でも、調査区全面で近世以降に作られた畑の跡が見つかりました。畝間溝が多く検出され、ほとんどが小金井村分水に交差するような軸で作られていました。一部の溝には火山灰が含まれており、分析の結果、宝永4年（1707）の富士山噴火による火山灰であることが分かりました。溝はそれ以前に作られたため、小金井村分水の許可後、程なくして畑として使われ始めたようですが、噴火を機に放棄されたものと思われます。また、明治8年（1875）に描かれた「貴井村全図 坂上」によると、調査地点は貴井村と小金井村の村境にあたります。調査では「村境界通」に隣接する溝が確認されました。他の溝と比べて深く掘られていることや、村境に隣接することから、区画溝や堀であると思われます。

Summary of the Koganei-shi No. 22 Site Excavation Report

The Tokyo Metropolitan Archaeological Center conducted an excavation survey of the Koganei-shi No.22 Site from July 1 to November 30, 2022. This survey was part of the reconstruction project of the Koganei-Honchō Housing Complex, managed by the Tokyo Metropolitan Housing Supply Corporation, commonly referred to as JKK Tokyo.

The Koganei-shi No. 22 Site is situated in Koganei, a city in the western area of Tokyo Metropolis, also known as the Tama Area, located on the Musashino Plateau. The city features the Musashino Terrace in the north and the Tachikawa Terrace in the south, separated by the Kokubunji Cliff Line. There are two natural rivers, the Nogawa River and the Senkawa River, and one artificial aqueduct, the Tamagawa Jōsui. The Nogawa River flows on the Tachikawa Terrace along the Kokubunji Cliff Line, and the Senkawa River and the Tamagawa Jōsui flow on the Musashino Terrace.

The Koganei-shi No. 22 Site is notable as the only site identified in the upper stream of the Senkawa River. Soil analysis revealed that the water flow of the river headwaters dates back to around 31,000 BCE. However, approximately after 20,000 BCE, it decreased, leading to the filling of the river valley. Despite this, the environment remained relatively wet due to groundwater presence.

During the excavation survey, artifacts and features from the Early Jomon Period (around 5000 BCE to 3600 BCE), Middle Jomon Period (around 3500 BCE to 2550 BCE), Early-Modern Period (Edo Period: 1603-1868), and Modern Period (Meiji Period onwards: 1868-) were unearthed.

The Jomon Period features included two trapping pits positioned about 2 meters apart, designed with axes pointing toward the lower elevation, indicating their purpose in capturing animals seeking water in the valley floor. Among the findings were Jomon pottery sherds found in a small area, mainly consisted of Moroiso-C Type pottery (around 3500 BCE) followed by Kasori-E Type pottery (around 2500 BCE). The coexistence of pottery from different periods in the same area suggests secondary deposition from above the valley. These pottery indicate the potential of finding more Jomon Period traces in areas above the valley of the Senkawa River, which are previously unexplored.

Regarding the Early-Modern and Modern Periods, the survey revealed ditches and furrows associated with agricultural fields. Prior to the Early-Modern Period, human activity in the northern part of the city was limited due to the lack of water resources. However, in 1653, the Tamagawa-Jōsui Aqueduct was established to supply water from the Tamagawa River to Edo (present-day metropolitan Tokyo). The Tamagawa-Jōsui had several dozen branches, forming an aqueduct system that supplied irrigation water to the farming villages in Musashino (present-day Tama Area). One of these branches in the city was the Koganei-mura Bunsui Aqueduct, which was made in 1696. The presence of volcanic ash from the Mt. Fuji eruption in 1707 in some of the furrows indicates that they were made before that eruption, suggesting agricultural use of the land shortly after the opening of the Koganei-mura Bunsui Aqueduct.

Another significant feature was a 1-meter deep ditch that crossed the survey area diagonally. Referencing the "Map of Nukui-mura" from 1875, this ditch was adjacent and parallel to the *Koganei-mura Kyōkai Dōri*, a boundary road between Nukui Village and Koganei Village. This suggests that the ditch may have functioned as a moat, marking the border between the two villages. While pre-modern land use in the northern area of the city remains somewhat unclear due to the absence of written records, the survey results shed light on historical land use.

In conclusion, the excavation survey of the Koganei-shi No. 22 Site yielded valuable findings from various historical periods, enhancing our understanding of the city's past and its human activities.

序　言

小金井市本町四丁目・五丁目に所在する小金井市 No.22 遺跡は、武藏野台地の武蔵野段丘上の、仙川の源流域に位置しています。

今回の調査は、東京都住宅供給公社による、小金井本町住宅建替事業に伴って実施されました。

今回の発掘調査は当遺跡の第一次調査であるとともに、仙川の上流域で初めての調査となりました。小金井市では、原始の頃から人々の生活は野川と国分寺崖線沿いの湧水に支えられており、大半の遺跡がここに集中します。一方で、仙川の上流域では、これまでごくわずかな遺物が確認されたのみで、人々の活動の痕跡はきわめて希薄な状況でした。

今回の調査では、縄文時代、近世、近代の遺構や遺物が確認されました。特に縄文時代の狩猟用の陥し穴が検出されたことは、当時の人々の活動域に仙川も含まれていたことの証左となりました。近世以降の溝や畠の跡についても、新田開発の様相をより具体的に示す貴重な資料です。仙川上流域での人々の活動の実態を知る上で、一步進めることのできた調査となりました。

これらの成果をまとめた本報告書が、多くの人々に活用され、小金井市の歴史を解明する資料となることを期待し、埋蔵文化財に対する都民の皆様の関心とご理解を深めていただくことができれば幸いです。

本報告書の発行にあたり、ご協力とご指導をいただきました東京都住宅供給公社、東京都教育委員会、小金井市教育委員会に厚くお礼を申し上げると共に、ご教示いただきました研究者の皆様と、ご協力いただきました地域の住民の皆様方に、心より感謝いたします。

令和5年9月
公益財団法人東京都教育支援機構
理事長　坂東眞理子

例　言

- 1 本書は、小金井本町住宅建替事業に伴う小金井市 No.22 遺跡の発掘調査報告（東京都埋蔵文化財センター調査報告第 378 集）である。
- 2 発掘調査事業は、東京都住宅供給公社の委託を受け、公益財団法人 東京都スポーツ文化事業団（現 公益財団法人 東京都教育支援機構）東京都埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 試掘調査は、小金井市教育委員会により、令和 3 年 9 月 27 日～同年 12 月 20 日にかけて実施された。
- 4 本遺跡において、今回の調査は第一次となる。
- 5 遺跡所在地：東京都小金井市本町四丁目 7 番地内
- 6 調査面積：995m²
- 7 発掘調査および一次整理期間：令和 4 年 6 月 1 日～同年 11 月 30 日
二次整理・報告書作成期間：令和 4 年 12 月 1 日～令和 5 年 6 月 30 日
- 8 本事業における事業者との事業調整等は東京都教育庁地域教育支援部管理課が担当・指導した。
埋蔵文化財課長代理 鈴木徳子
埋蔵文化財担当 大谷 薫（令和 4 年 6 月 1 日～）
- 9 調査担当者
東京都埋蔵文化財センター小金井本町分室
調査課課長代理 内野 正
調査研究員 高田優衣（令和 4 年 6 月 1 日～）
調査指導 竹花宏之（令和 4 年 6 月 1 日～同 5 年 3 月 31 日）
調査協力
株式会社ジオダイナミック 株式会社ヒューマンテック
- 10 本報告書は、高田、内野、竹花が執筆し、編集は高田が行った。文責は各項末に示した。
- 11 縄文土器の圧痕調査は、守屋 岩（東京都埋蔵文化財センター）が行った。
- 12 本調査に係る分析委託は以下のとおりである。
土壤分析 パリノ・サーヴェイ株式会社
- 13 本報告の調査成果として、「小金井市 No.22 遺跡現場見学会配布資料」および「令和 4 年度東京都埋蔵文化財センター主催遺跡発掘調査発表会要旨」、「令和 4 年度東京都埋蔵文化財センター年報 43」があるが、本書の刊行をもって最終報告とする。
- 14 出土遺物および発掘調査・整理に関わる図面・写真等記録類は、小金井市教育委員会で保管している。
- 15 本書で使用した地図類・写真等の出典については、各挿図・図版中に表記している。
- 16 本文用例等
 - ・土色の表記には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、土色・マンセルノーションで表した。

- ・本書で使用した標高は東京湾平均海面（T.P.）である。
 - ・各挿図の縮尺は図中に示した。図中の方位記号は真北を示す。
 - ・各挿図中で用いたトーンおよびドットは各挿図中に凡例を示した。
- 17 発掘調査および整理にあたり、下記の方々と機間にご指導・ご協力を賜った。記して、深謝いたします。（五十音順・敬称略）
小金井市教育委員会 東京都住宅供給公社 江里口省三 高木翼郎 野口淳 橋本眞紀夫
日高慎 依田亮一
- 18 本報告書の著作権は、公益財団法人 東京都教育支援機構 東京都埋蔵文化財センターが保有する。

目次

小金井市 No.22 遺跡の調査

Summary of the Koganei-shi No. 22 Site Excavation Report

序言

例言

I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	2
1) 調査の方法	2
2) 発掘調査の経過	5
3) 整理作業の経過	7
II 遺跡の位置と環境	7
1 地理的環境	7
2 歴史的環境	8
III 層序	15
IV 遺構と遺物	20
1 繩文時代	20
1) 遺構	20
a) 土坑	20
b) 集石	24
2) 遺物	25
a) 土器	25
b) 石器	27
2 近世以降	31
1) 遺構	31
a) 溝状遺構	31
b) 焼土跡	37
c) ピット	37
2) 遺物	37
a) 陶器・磁器	37
b) ガラス製品	39
c) 煉瓦	42
V 自然科学分析	43
1 小金井市 No.22 遺跡の自然科学分析	43
2 小金井市 No.22 遺跡出土縄文土器の圧痕調査について	52
VI 調査の成果と課題	54
1 繩文時代	54
2 近世以降	54
参考文献	56

挿図目次

第1 図	遺跡の位置	1
第2 図	事業用地範囲と試掘調査トレンチ位置図（1/800）	3
第3 図	グリッド設定図（1/2,500）	4
第4 図	調査区設定図（1/800）	6
第5 図	武藏野台地の地形区分	8
第6 図	遺跡周辺図（1/25,000）	10
第7 図	基本層序（1/100, 1/400）	17
第8 図	遺構全体図（1/200）	21
第9 図	SK01・SK02（1）（1/40）	23
第10 図	SK01・SK02（2）（1/60）	24
第11 図	調査区ローム層上面（V層上面）等高線図（1/400）	25
第12 図	SS01 碠出土位置図（1/100）	26
第13 図	縄文時代の遺物（1/3, 3/4）	28
第14 図	縄文土器分布図（1/100）	29
第15 図	SD01・02・07（1）（1/100）	32
第16 図	SD01・02・07（2）（1/40, 1/20）	33
第17 図	SD03～06・SX01（1/100, 1/40）	35
第18 図	SPO1-10（1/40）	36
第19 図	近世・近代遺物（1/3, 2/3）	40
第20 図	ローム堆積状況確認トレンチ北壁土壤サンプル（No.1）の重鉱物組成および火山ガラス比	45
第21 図	火山ガラスの屈折率（1）	46
第22 図	火山ガラスの屈折率（2）	47
第23 図	重鉱物・火山ガラス	50
第24 図	テフラ分析資料	51
第25 図	種実圧痕真	53

表目次

第1 表	工程表	5
第2 表	周辺遺跡一覧表	11
第3 表	縄文遺構観察表	24
第4 表	礫一覧表	26
第5 表	縄文土器観察表	30
第6 表	縄文石器一覧表	30
第7 表	近世・近代遺構観察表	38
第8 表	近世以降陶器観察表	41
第9 表	近代ガラス製品観察表	41
第10 表	近代煉瓦観察表	42
第11 表	ローム堆積状況確認トレンチ北壁土壤サンプル（No.1）の重鉱物・火山ガラス比分析結果	45
第12 表	種実圧痕一覧	53

図版目次

図版 1

- 1 区 調査着手前（南東から）
- 2 区 調査着手前（南西から）

図版 2

- 1 区 調査区東壁（南西から）
- 2 区 調査区東壁（北西から）

図版 3

- 1 区 調査区北壁（南から）
- 2 区 調査区北壁 ローム堆積状況（南から）

図版 4

- SK01・SK02 完掘状況 全景（北西から）
- SK01 完掘状況（南西から）
- SK01 セクション（北西から）
- SK01 下部施設 セクション（南西から）
- SK01 下部施設 セクション（南西から）

図版 5

- SK01 下部施設 完掘状況（南西から）
- SK02 完掘状況（北西から）
- SK02 セクション（北西から）
- SK02 下部施設 セクション（北東から）
- SK02 下部施設 セクション（北東から）
- SK02 下部施設 完掘状況（北東から）

図版 6

- 1 区 繩文土器出土状況（南から）
- 2 区 繩文土器出土状況（南西から）

図版 7

- SS01 遺物出土状況（東から）
- SS01 遺物出土状況（北から）

図版 8

- SD03～06・SX01 検出状況（南から）
- SD03～06・SX01 完掘状況（南から）

図版 9

- SD03 完掘状況（南東から）
- SD03 セクション（南東から）
- SD04 完掘状況（南東から）
- SD04 セクション SPA-A'（南東から）
- SD04 セクション SPB-B'（南東から）
- SD05 完掘状況（南東から）
- SD05 セクション（南東から）
- SD06 完掘状況（南東から）

図版 10

- SD06 セクション（南東から）
 - SX01 焼土範囲 検出状況（北西から）
 - SX01 焼土跡 完掘状況（南東から）
 - SX01 焼土跡 セクション（北西から）
- 5 区 近世以降遺構検出状況 全景（南から）

図版 11

- SD01・02 セクション SPA-A'（南西から）
- SD01 セクション SPA-A'（南西から）
- SD02 セクション SPA-A'（南西から）
- SD01・02 セクション SPB-B'（南西から）
- SD01 セクション SPB-B'（南西から）
- SD02 セクション SPB-B'（南西から）
- SD01 セクション SPC-C'（南西から）
- SD07 セクション SPA-A'（南西から）

図版 12

- SD07 セクション SPB-B'（南西から）
- SP01 完掘状況（西から）
- SP01 セクション（西から）
- SP02 完掘状況（南西から）
- SP02 セクション（南西から）
- SP03 完掘状況（東から）
- SP03 セクション（東から）

図版 13

- SP04 完掘状況（南西から）
- SP04 セクション（東から）
- SP05 完掘状況（北東から）
- SP05 セクション（北東から）
- SP06 完掘状況（南から）
- SP06 セクション（南から）
- SP07 完掘状況（東から）
- SP07 セクション（東から）

図版 14

- SP08 完掘状況（北から）
- SP08 セクション（北から）
- SP09 完掘状況（北から）
- SP09 セクション（北から）
- SP10 完掘状況（北東から）
- SP10 セクション（北東から）

図版 15

- 1 区 完掘状況 全景（南から）
- 2 区 完掘状況 全景（南から）

図版 16

- 1 区 調査終了後（南西から）
- 2 区 調査終了後（西から）

図版 17

- 縄文時代 遺物写真図版

図版 18

- 近世～近代 遺物写真図版

附図目次

附図 1 「小金井村絵図」 明治 2 年（1869）

附図 2 「貫井村全図 坂上」 明治 8 年（1875）

附図 3 「神奈川縣武藏國北多摩郡小金井村及貫井村」 明治 13 年（1880）

附図 4 「小金井町全図」 昭和 12 年（1937）

附図 5 陸軍航空写真 昭和 16 年（1941）6 月 25 日撮影

米軍航空写真 昭和 22 年（1947）11 月 14 日撮影

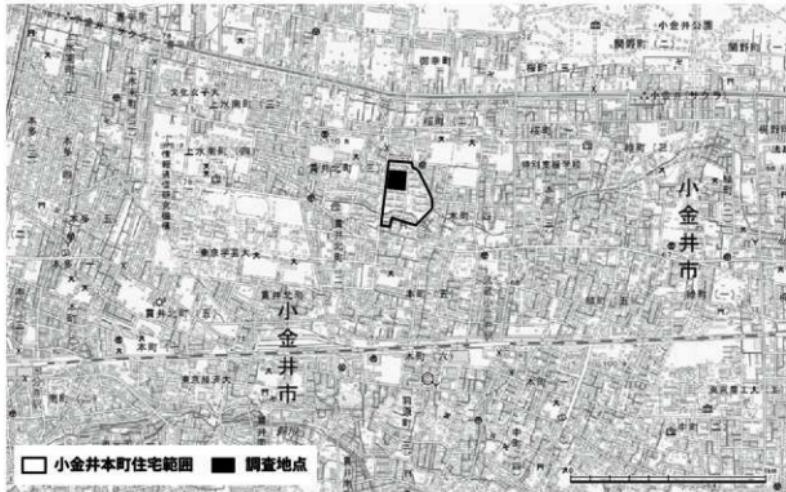
I 発掘調査の概要

1 調査に至る経緯

東京都住宅供給公社小金井本町住宅は、小金井市本町四丁目に所在し、昭和 35・36 年（1960・1961）に建設された、22 棟の大規模団地である。東京都住宅供給公社では「公社一般賃貸住宅の再編整備計画」に基づき、建替え等の再編整備を実施しており、小金井本町住宅も平成 31 年度（2019）に再編整備事業に含まれることとなった。今回の事業では一部既存住戸の建替えに伴い、「コーチャハイム小金井（仮称）」として住宅 1 棟と特別養護老人ホーム、都市計画公園の整備が行われることとなった。

小金井本町住宅の南側は「小金井市 No.22 遺跡」の範囲と接しており、遺跡の取扱いについて、東京都住宅供給公社（以下、公社）・東京都教育委員会（以下、都教委）・小金井市教育委員会（以下、市教委）による協議が行われ、試掘調査が令和 3 年 9 月 27 日から同年 12 月 20 日にかけて実施された。試掘調査の結果、縄文時代の遺構・遺物が確認されたことから、同時代の遺跡が埋蔵されていることが推定され、本調査を実施することとなった。本調査は公益財団法人東京都スポーツ文化事業団（現公益財団法人東京都教育支援機構）東京都埋蔵文化財センター（以下、都埋文）が担当することとなった。

これを受け、令和 4 年 3 月 25 日に「小金井本町住宅埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」において、東京都住宅供給公社理事長・東京都教育委員会教育長・公益財団法人東京都スポーツ文化事業団（当時）



第 1 図 遺跡の位置

理事長の3者名により、調査に関する協定書が締結された。その後、3者による埋蔵文化財調査実施に係わる調整・協議が行われ、令和4年5月17日付で公社と都埋文による調査委託契約が締結された(4総公委契第0045号)。令和4年5月13日に発掘届が都埋文所長より都教委教育長に提出され(4S文事埋文第2146号)、令和4年6月10日付で発掘調査の通知を得た(4教地管理第871号)。

(高田)

2 調査の方法と経過

1) 調査の方法

グリッドの設定

今回の発掘調査は小金井市No.22遺跡の第一次調査にあたるため、今回新たにグリッドを設定した。本調査を実施するにあたり、小金井市教育委員会と協議を行い、現在の包蔵地範囲に加え、将来的に小金井本町住宅の敷地も登録する予定があることから、グリッド範囲は従来の登録範囲と小金井本町住宅を網羅する範囲で設定した(第3図)。グリッドは世界測地系に基づき、起点を北西隅、座標値X=32160, Y=-30140に設定し、4×4mのグリッドに対し、東西方向に算用数字、南北方向にアルファベットを振り分けた。東西は1～86まで、アルファベットはA～Z以降AA,AB,AC…AZ,BA,BB,BC…BZと続け、A～DFまで使用した。

事業用地は、小金井本町住宅の7-1～5号棟や児童北遊園地、給水塔が所在した約10,000m²にある(第2図)。このうち、試掘結果に応じて、建替工事で影響を及ぼす範囲約940m²が発掘調査予定範囲とされた。調査区は、建設予定建物の北東隅にあたり、二つの長方形が直角に接するような形状をしていたため、北側を「1区」、東側を「2区」と設定した(第4図)。

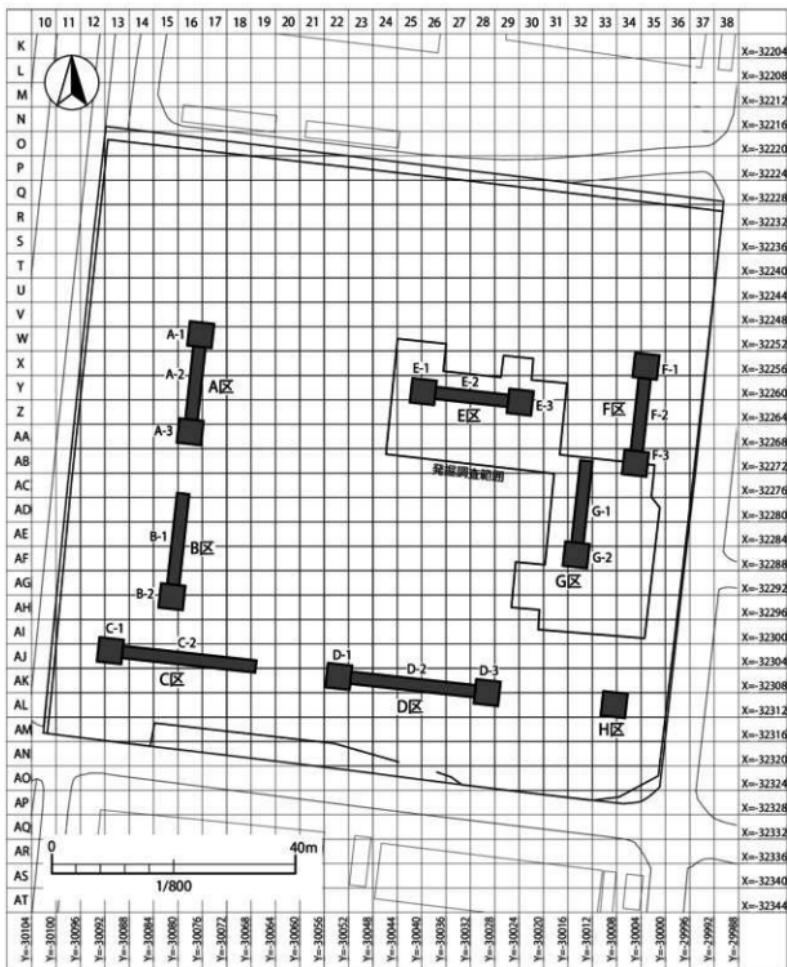
発掘調査

発掘調査の方法について、表土はバックホウによる掘削、包含層はバックホウと人力の併用での掘削、遺構の検出や調査は人力による掘削を行った。掘削による発生土は事業用地内に仮置きし、調査終了後に埋め戻すこととした。調査地点は団地内に位置するため、発生土の仮置き場は防塵シート等による養生や散水を行い、適宜飛散防止対策を講じながら作業を進めた。

遺構の記録のうち、平面図作成は機械測量により行い、遺構や基本層序の土層断面図は手描きによる作図を行った。遺物の取上げ方法としては、表土および耕作土、搅乱から出土した遺物についてはグリッド単位での一括取上げ、包含層および遺構内から出土した遺物については機械測量による点上げを行った。写真撮影は35mmフィルム(モノクロネガフィルム・カラーリバーサルフィルム)を基本に、併せてデジタル一眼レフ(APS-Cサイズ)による撮影を行った。撮影は遺構検出状況や土層断面、完掘状況等、調査の進捗に応じて適宜行い、全景撮影には高所作業車を使用した。

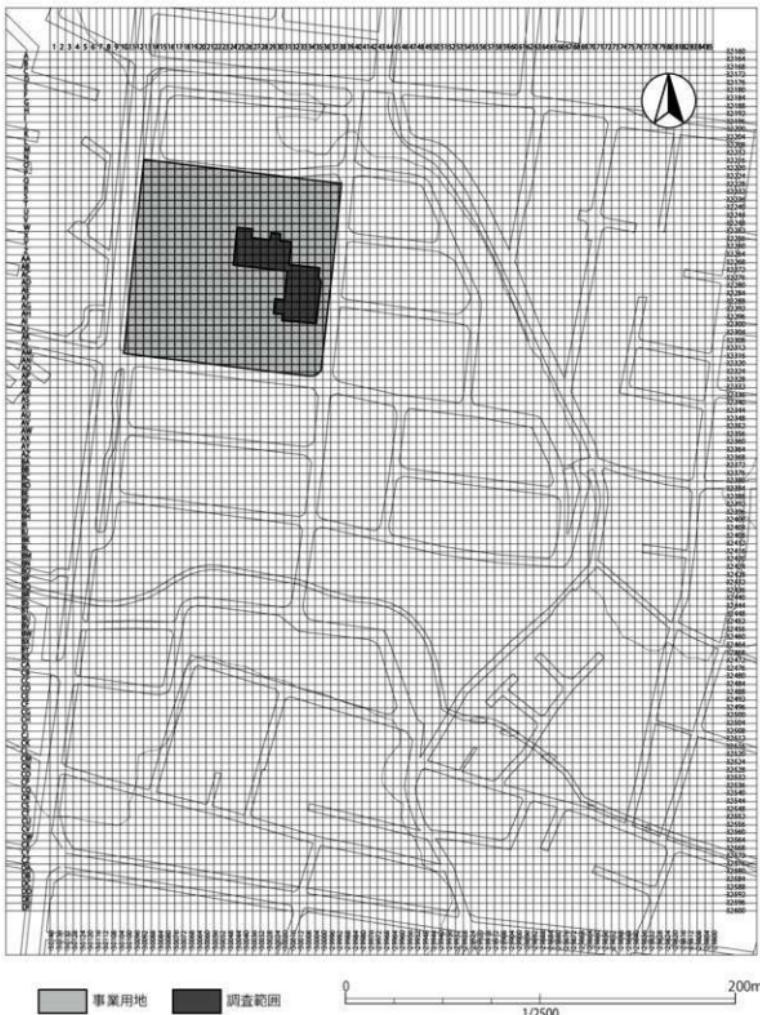
整理作業

整理作業の方法について、一次整理は発掘調査期間中に開始し、遺物洗浄を中心に行なった。発掘調査工期の都合から、遺物注記は二次整理作業移行後に行うこととした。二次整理作業は事務所を移転して作業を行った。遺構に関しては、「遺構くん」と「Adobe Illustrator」を使用し、図版を作成した。



出典：国土地理院基盤地図情報をもとに作成

第2図 事業用地範囲と試掘調査トレンチ位置図（1/800）



出典：国土地理院基盤地図情報をもとに作成
第3図 グリッド設定図 (1/2,500)

遺物に関しては、縄文土器、石器、近世から近代の陶磁器・ガラス製品・煉瓦の実測・拓本を行い、遺構図面と同様に Adobe Illustrator を使用してトレースを行い、図版を作成した。遺物写真については、発掘調査で使用したのと同じデジタル一眼レフを使用し、撮影を行った。

2) 発掘調査の経過

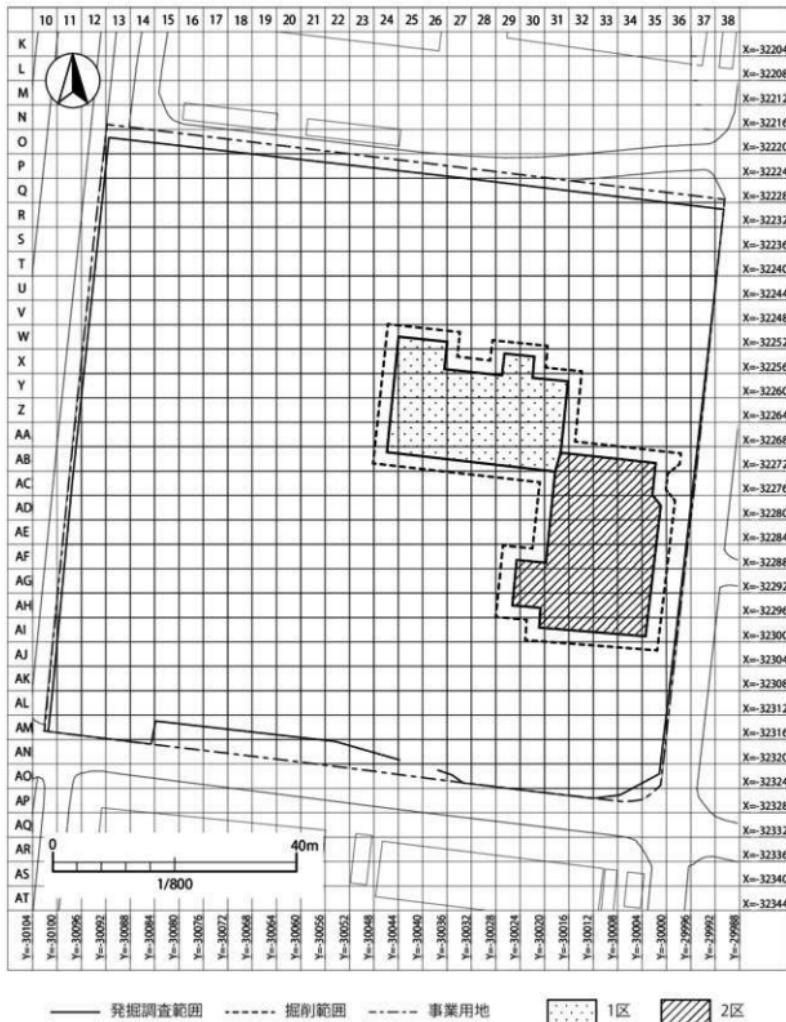
令和4年(2022)6月4日に現地確認を行い、6月14日に仮設ゲートを設置した。6月15日にパックホウ(0.35m³)を搬入、6月17日にユニットハウスの搬入、6月20日から7月1日にかけてインフラの引き込みを行い、事務所の設置が完了した。

調査区内に残置されていた旧給水塔壁片および景石の移設工事を7月4日に行い、7日から調査区の設定を開始し、11日に1区の表土掘削を開始した。埋め戻された試掘坑の再掘削も行い、7月27日に1区の表土掘削を終了した。1区遺構確認・測量と並行して、2区の表土掘削を7月29日に開始し、8月10日に終了した。この時に、調査区と事業用地内の樹木が一部近接していたため、公社および都教委と協議を行い、調査範囲を一部縮小する形で変更することとした。表土の主体は小金井本町住宅造成時の盛土で、1区でG.L.-0.7～1.0m程度、2区でG.L.-1.0～1.5m程度まで達していた。調査区の大半が公園用地として使用されていた範囲にあたり、ほとんど削平を受けておらず、盛土直下からは近代の耕作土層が確認された。

8月18日から1区耕作土の機械掘削を開始し、9月1日に完了、5日から1区近世以降遺構の調査を開始し、21日に完了、10月6日に全景撮影を行った。この間に、10月下旬開催予定の現場見学会の開催が決定したため、1・2区の調査を並行する当初の予定から、1区近世・近代遺構群を見学会開催時まで残すため調査を一時中断し、2区の調査を先行するよう変更した。9月21日から2

第1表 工程表

		令和4年度										令和5年度			
		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	
発掘調査	準備工	[■]													
	表土掘削		[■]												
	包含層掘削・遺構調査			[■]	[■]	[■]	[■]	[■]							
	埋め戻し・撤去工							[■]							
	遺物洗浄					[■]	[■]	[■]							
一次整理	注記								[■]						
	基礎分類								[■]						
	遺物分類								[■]						
	接合・復元							[■]	[■]						
	台帳作成							[■]	[■]						
二次整理	遺物実測								[■]	[■]					
	遺物写真撮影									[■]					
	図版作成								[■]	[■]					
	原稿執筆										[■]	[■]			
	報告書編集												[■]		



出典：国土地理院基盤地図情報をもとに作成

第4図 調査区設定図 (1/800)

区耕作土以下の調査を開始し、19日に2区最終面までの調査を終了、翌20日に2区の部分終了確認を行った。この時に、2区調査区南端から2基の陥し穴が検出されたが、作業工程の都合により、東京都教育委員会との協議の上、陥し穴は別途終了確認を行うことになった。10月20日・21日の2日間に現場見学会を実施し、24日に2区の完掘全景撮影を行い、28日から一部埋め戻しを開始した。1区は10月24日から調査を再開、11月2日に最終面までの調査を終了し、7日に1区部分終了確認、8日に完掘全景撮影を実施し、14日から埋戻しを開始した。2区で検出された2基の陥し穴は、1区の調査終了後、11月4日から調査を再開し、16日開催の定例会に併せて部分終了確認を実施した。これを以て、発掘調査の全工程を終了し、翌17日から撤収作業に移行した。11月30日に撤収作業が完了し、12月1日に東京都住宅供給公社の現地終了確認を実施し、事業用地の引き渡しを行った。

3) 整理作業の経過

二次整理作業に先駆け、現地仮設事務所にて遺物洗浄・粗分類などの一次整理作業を実施した。発掘調査終了後は外地へ事務所を移転し、12月1日から移転先の整理作業事務所で二次整理を開始した。12月から遺構図面の整理・修正を行い、12月中旬に終えた後、続けて遺構図面・図版の作成を行い、1月下旬に完了した。同時に、12月から遺物の分類・接合を開始し、これを1月中旬に終え、続けて遺物実測を開始し、2月下旬に完了した。各台帳の作成は、上記の作業と並行して行った。3月から遺物実測図のトレース作業、遺物図版の作成、遺物写真撮影、観察表の作成を行い、4月下旬に全ての図版・表組の作成を一通り終えた。5月の連休明けからは、遺物移管に向け、遺物の梱包作業と、各種成果品の最終的な整理・修正を行い、5月25日に小金井市教育委員会の立会のもと、小金井市文化財センターに遺物と各種成果品の移管を完了した。整理事務所は5月31日に退去手続を行い、これを以て調査の全工程を完了した。

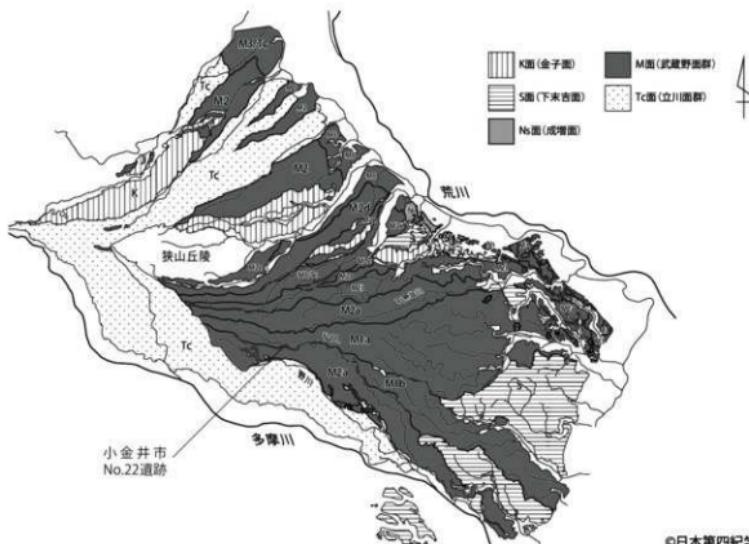
(高田)

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

小金井市No.22遺跡（小金井市遺跡番号22）は、小金井市本町四丁目7番地内、東京都住宅供給公社小金井本町住宅の敷地内に所在する。

小金井市は東京都のほぼ中央、武蔵野台地の南西部に位置している（第5図）。武蔵野台地は北西を入間川、北東を荒川、南を多摩川の沖積低地に限られる洪積台地で、青梅市を頂点とし、北東の川越市から南西の東京山の手へと広がる。市域の全てが武蔵野台地に含まれ、国分寺崖線を境界として、地形的に大きく南北に分けられる。国分寺崖線より北は武蔵野面にあたり、仙川を境に、北側が武蔵野1（M1）面、南側が武蔵野2（M2）面に細別される。国分寺崖線より南は立川面にあたり、市域が含まれるのは立川面で最も高い立川1（Tc1）面である。武蔵野面には仙川、石神井川、立川面には野川が旧多摩川の名残川として残された。台地の地層は、第三紀の三浦層群と呼ばれる砂岩からなる海成層を基盤にして、第四紀の海成層である上総層群、多摩の段丘疊層、さらにその上に関東ローム層が堆積し、表面を黒土が覆っている。



第5図 武藏野台地の地形区分

出典：遠藤他 2019図4をト雷斯・加工して作成

本調査地点は仙川の源流域、谷内部の窪地に位置しており、地形から見ておそらく谷の底部付近だと思われる。現在確認できる谷の比高差は7m程度だが、盛土の状況から少なくとも、宅地造成前は約8~9mほどの比高差があったと思われる。仙川の上流端は、現在小金井市貫井北町の新小金井街道と仙川の交わる地点と定められているが、かつては小平市上水南町と貫井北町の2ヶ所に水源を持ち、本事業地内で合流していた。調査地点のローム土層の土壤分析の結果、後期旧石器時代時代前葉から中葉にかけて離水し、谷の埋積が進んだと考えられる。

(高田)

2 歴史的環境

小金井市No.22遺跡は仙川の谷間にあたり、本調査では谷の底部付近で発掘調査を行った。当遺跡は仙川源流域で唯一確認されている遺跡で、旧石器時代・縄文時代早期の包蔵地として周知されていた。旧石器時代の剥片と縄文時代早期の土器が採集されており、また遺跡から約800m離れた、本町三丁目で縄文時代草創期の尖頭器が採集されている(『小金井市史資料編 考古・中世』)。仙川の源流は縄文時代以前に枯渇しており、江戸時代の玉川上水開削まで、市域の生活空間の中心を占めるのは野川流域で、当遺跡を除いた全ての遺跡が野川流域で確認されている。以下では、野川流域を中心に、市内の遺跡について、時期ごとに概要を述べていく(第6図、第2表)。

旧石器時代

市内の 23 遺跡のうち、18 の遺跡で旧石器時代の文化層が確認されており、中でも西之台遺跡（4）、平代坂遺跡（3-1）、中山谷遺跡（5）、はけうえ遺跡（2）等の旧石器時代の大規模遺跡は、立川ローム X 層からⅢ層まで連続する多数の文化層が検出されている。

旧石器時代の大半が位置する野川流域では、旧石器時代初頭に多摩川が国分寺崖線の下を流れている影響もあり、市内では武藏野面上の崖線縁辺部で確認されている遺跡の割合が多い。立川面の遺跡では、わずかな石器と小規模な石器集中部しか残されておらず、短期的・一時的な滞在にのみ使用されていたと思われる。一方で、武藏野面上の遺跡では、X 層の小規模な居住地・キャンプ跡が確認されている。

その後、旧石器時代前半期には、多摩川は徐々に南下し、現在の多摩川低地の方へ移動していた。この時期の遺跡は、はけうえ遺跡（2）、平代坂遺跡（3-1）、西之台遺跡（4）、中山谷遺跡（5）、野川中洲北遺跡（18）など、X 層から継続して利用され、また前半期の間も繰り返し居住されていた遺跡が多いことが特徴として挙げられる。しかし、後半期と比較すると、出土石器点数や石器集中部は少なく、一ヶ所に長く留まるのではなく、短期的な滞在と移動を繰り返していたと思われる。

旧石器時代後半期には、武藏野台地全体で、前半期と比較して遺跡数、文化層数、出土石器の点数、石器集中部や礫群の数など、活動痕跡が大幅に増加する。市内でも、数百～千点以上の石器が出土し、礫群も多数検出された大規模遺跡が確認されている。前原遺跡（12）では礫群の規模や接合状態などから、一度限りの使用ではなく、地点を変えて繰り返し利用されていることが分かり、これらの大規模遺跡は、ベースキャンプとして、拠点のように使われていたと考えられている。

縄文時代

野川流域の縄文時代遺跡は、22 遺跡が確認されている。このうち住居跡を始めとした遺構を伴う「集落遺跡」が 14 遺跡である。これらの集落遺跡の立地は低地・微高地に位置する野川中洲北遺跡（18）を除き、基本的に台地上もしくは台地縁辺・斜面地に立地する。市内で検出された住居跡は計 190 軒で、内訳は早期 19 軒、中期 165 軒、後期 16 軒である。中期が突出しており、草創期、前期、晩期の住居跡は確認されていない。草創期は、前原遺跡（12）や野川中洲北遺跡（18）で遺物が出土している。野川中洲北遺跡（18）では埋没谷にまとめて土器・石器を廃棄していたことから、付近に居住地や作業場などが存在していた可能性は高いが、これまでに同時期の遺構は確認されていない。

縄文時代早期については、野川流域は比較的住居跡の検出数が多く、はけうえ遺跡（2）で早期前半の住居跡が 12 軒確認されている。このうち、6 軒は崖線縁辺の平坦部で確認され、10 軒は崖線の斜面地で確認された。早期中頃の住居跡は確認されておらず、早期後半でははけうえ遺跡で 2 軒確認されている。また、西之台遺跡 B 地点（4）では 22 基の炉穴が確認されている。

一方で、縄文時代前期の痕跡は市内では希薄で、はけうえ遺跡（2）、前原遺跡（12）、西之台遺跡（4）、中山谷遺跡（5）、荒牧遺跡（8）、貫井南遺跡（9）、そして今回報告する小金井市 No.22 遺跡（22）で前期の土器が確認されているが、今までに住居跡等の遺構は確認されていない。野川流域全体でも前期の集落遺跡は稀で、上流域の国分寺市花沢東遺跡で諸磯 b 式期の住居跡が 1 軒、下流域では狛江市第三中学校南遺跡で黒浜式期の住居跡が 1 軒、寺前東遺跡で諸磯 b 式期の住居跡が 2 軒検出さ

出典：国土地理院基盤地図情報、東京都道路地図情報インターネットサービスもとに作成

第6図 遺跡周辺図（1/25,000）



第2表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代
1 小金井市 No.1	貫井遺跡	貫井南町三丁目	集落	旧 / 縄草・前・中・後
2 小金井市 No.2	はけうえ遺跡	貫井南町二丁目 前原町三丁目	集落	旧 / 縄草・早・前・中・後
3-1 小金井市 No.3-1	平代坂遺跡	前原町三丁目	集落	旧 / 縄中 / 中世
3-2 小金井市 No.3-2	前原塙穴墓	前原町三丁目	横穴墓	古
4 小金井市 No.4	西之台遺跡	前原町三丁目 中野四丁目	集落	旧 / 縄草・早・前・中・後
5 小金井市 No.5	中山谷遺跡	中野一・四丁目	集落	旧 / 縄草・前・中・後
6 小金井市 No.6	栗山遺跡	中野一丁目 東町五丁目	集落	旧 / 縄中
7 小金井市 No.7	ICU Loc.15 遺跡	東町一・五丁目	集落	旧 / 縄中
8 小金井市 No.8	荒牧遺跡	貫井南町四丁目	集落	旧 / 縄前・中・後 / 近世
9 小金井市 No.9	貫井南遺跡	貫井南町二丁目	集落	旧 / 縄草・前・中・後
10 小金井市 No.10	小金井市 No.10 遺跡	前原町五丁目	包蔵地	縄前・中
11 小金井市 No.11	小金井市 No.11 遺跡	前原町三丁目	包蔵地	縄 / 中世
12 小金井市 No.12	前原遺跡	前原町一・二丁目	集落	旧 / 縄草・早・前・中・後 / 近世
13 小金井市 No.13	小金井市 No.13 遺跡	中野四丁目	包蔵地	縄
14 小金井市 No.14	新橋遺跡	中野一丁目	集落	旧 / 縄後
15 小金井市 No.15	小金井市 No.15 遺跡	前原町二丁目	包蔵地	縄
16 小金井市 No.16	七軒家遺跡	前原町二丁目	包蔵地	旧 / 縄草・早・前・中・後 / 古 / 中世 / 近世
17 小金井市 No.17	野川中洲遺跡	前原町二丁目	包蔵地	旧 / 縄後
18 小金井市 No.18	野川中洲北遺跡	中野一丁目	集落	旧 / 縄草・早・後 / 古 / 平 / 中世 / 近世
19 小金井市 No.19	武藏野公園湿地遺跡	中野 東町五丁目	包蔵地	旧 / 縄前・中・後 / 古 / 中世 / 近世
20 小金井市 No.20	小金井市 No.20 遺跡	東町一丁目	包蔵地	旧 / 縄中・後
21 小金井市 No.21	野川公園遺跡	東町一丁目	集落	縄中・後
22 小金井市 No.22	小金井市 No.22 遺跡	本町四・五丁目	包蔵地	旧 / 縄早・前 / 近世 / 近代
23 小金井市 No.23	本町六丁目遺跡	本町六丁目	包蔵地	旧 / 縄 / 近世 / 近代
24 三鷹市 No.1	ICU 構内遺跡群	大沢三丁目	集落	旧 / 縄早・前・中・後 / 泽 / 平 / 近世
25 三鷹市 No.2	野川公園遺跡	大沢三丁目	包蔵地	旧 / 縄中 / 近世
26 小平市 No.3	鈴木遺跡	鈴木町 回田町 嶩奈町	包蔵地・集落	旧 / 縄前・中 / 近世
27 調布市 No.27	野川遺跡	野川一・二丁目	包蔵地・集落	旧 / 縄早・前・中・後 / 泽
28 府中市 No.13	天神町遺跡	天神町一・四丁目 余町二・三丁目	包蔵地	旧 / 縄早・前・中・後 / 泽 / 平
29 府中市 No.14	新町遺跡	新町二丁目	包蔵地	縄
30 府中市 No.18	武藏野公園遺跡	多磨町三丁目	集落	旧 / 縄早・前・中・後 / 泽
31 府中市 No.19	府中市 No.19 遺跡	多磨町三丁目	包蔵地	縄
32 府中市 No.20	府中市 No.20 遺跡	多磨町三丁目	包蔵地	縄中
33 国分寺市 No.6	国分寺市 No.6 遺跡	本町一・二丁目 本多一丁目	包蔵地	縄中
34 国分寺市 No.20	霞ヶ谷北遺跡	南町一丁目	集落	旧 / 縄早・中
35 国分寺市 No.21	霞ヶ谷戸遺跡	南町二丁目 東元町一・二丁目	集落	旧 / 縄早・中
36 国分寺市 No.23	国分寺市 No.23 遺跡	東元町二丁目	包蔵地	縄 / 泽 / 平
37 国分寺市 No.24	国分寺市 No.24 遺跡	東元町一丁目	包蔵地	縄 / 泽 / 平
38 国分寺市 No.25	国分寺市 No.25 遺跡	東元町一丁目	包蔵地	縄 / 泽 / 平
39 国分寺市 No.26	国分寺市 No.26 遺跡	東元町二丁目	包蔵地	縄 / 泽 / 平
40 国分寺市 No.27	国分寺市 No.27 遺跡	東元町二丁目	包蔵地	縄中
41 国分寺市 No.28	本町(国分寺村石器時代)遺跡	南町二丁目 本町二丁目	集落	旧 / 縄中 / 泽 / 平
42 国分寺市 No.29	国分寺市 No.29 遺跡	南町一丁目 本町一丁目	包蔵地	旧 / 縄 / 泽 / 平
43 国分寺市 No.30	国分寺市 No.30 遺跡	本多一丁目 本町二丁目	包蔵地	縄 / 泽 / 平
44 国分寺市 No.32	長谷川遺跡	東元町一丁目	包蔵地	縄早・中・後
45 国分寺市 No.53	東京経済大学構内遺跡	南町一丁目	包蔵地	旧 / 縄早・中
46 国分寺市 No.54	花沢東遺跡	南町二・三丁目	集落	旧 / 縄

れるに留まっている。

縄文時代中期は野川流域において、最も多くの生活痕跡が認められる時期で、特に中期前半～後半、勝坂1式期～加曾利E3式期で住居数はピークを迎える。市内で検出された住居数は165軒で、このうち貫井遺跡（1）で55軒、中山谷遺跡（5）で49軒が確認されている。一方で、1～10軒程度の住居跡が確認されている栗山遺跡（6）や前原遺跡（12）、けうえ遺跡（2）なども存在し、從前から前者を大規模集落遺跡、後者を小規模集落遺跡とされてきた。しかし、近年では「新地平編年」（小林・中山・黒尾2004）の整備に伴い、市内の縄文時代中期の集落遺跡のあり方への再検討も行われている。

縄文時代後期になると中期に比べて遺跡数が減少する。市内では武藏野面上のはけうえ遺跡（2）、栗山遺跡（6）と、立川面上の荒牧遺跡（8）、前原遺跡（12）、新橋遺跡（14）、野川中洲北遺跡（18）、武藏野公園低湿地遺跡（19）で後期の生活痕跡が確認されており、遺跡の立地が武藏野面上から野川沿いの低位段丘に移行することが知られている。低湿地遺跡である武藏野公園低湿地遺跡では、有機質遺物が多く確認され、水さらし場遺構とされる足場状の木材集積遺構や、トチ、オニグルミなどの堅果類、木製品、漆製品が出土している。野川流域では、中期の遺跡が崖線上の平坦面に立地するのに対し、後期になると崖線の斜面や野川沿いの立川面や低湿地にまで遺跡が見られるようになり、後期になると河川や低湿地に関わる生業に重点が移行したためだと考えられている。

縄文時代晚期の遺跡は市内では確認されていない。これは野川流域全体に見られる傾向で、近隣で確認できる晚期の遺跡は、調布市下布田遺跡や、多摩市新堂遺跡、日野市南広間遺跡、府中市大国魂神社裏遺跡など、多摩川を臨む府中崖線付近や、多摩川沿いの沖積低地で確認される。

弥生時代

市内では弥生時代の遺跡は確認されていない。野川上流域では、国分寺市花沢東遺跡で弥生時代中期の土器が発見されているのみである。調布市内では、多摩川下流域、野川・仙川流域で弥生時代後期を中心とする遺跡が複数知られている。多摩川下流域と比べると野川・仙川流域で確認される遺跡は少なく、多くの人が居住していたとは考えにくい。

古墳時代

市内で確認されている古墳時代遺跡は3遺跡である。武藏野公園低湿地遺跡（19）では水利土木遺構が検出されている。周辺から古墳時代前期の土師器片も出土し、付近に集落がある可能性が高いとされている。また、前原横穴墓（3-2）は市内で唯一確認されている古墳時代の墓である。隣接する三鷹市でも、坂上横穴墓群や出山横穴墓群、野水橋横穴墓群などの横穴墓が野川流域に多数発見されており、前原横穴墓は最も上流域で確認されている。前原横穴墓は概ね8世紀前葉に位置づけられ、概ね7世紀後半を中心とする三鷹市内の横穴墓群よりやや新しく、時期が下るにつれ野川上流域まで造墓の範囲が広がっていったと考えられている。

奈良・平安時代

市内の奈良・平安時代の遺跡は、野川中洲北遺跡（18）で複数の土坑群と、その周辺から土師器・

須恵器などの土器類や瓦、金属製品が少量出土しており、はけうえ遺跡(2)や貫井遺跡(1)でも土師器・須恵器などの遺物が確認されている。隣接する府中、国分寺市域には武藏国府と武藏国分寺・国分尼寺が所在していたのに対し、小金井市内の古代の居住痕跡はきわめて希薄であり、野川流域で同時代の居住の形跡が見られないのは小金井市域のみという状況である。

居住に適した地では無かったものの、近年では古代東海道の渡河地点であったとの見方もある（『小金井市史通史編』）。武藏国の主要駅場は東山道武藏路であったが、宝亀2年（771）の東海道編入後は相模から武藏国府を経由して下総方面へ抜ける経路に変更された。武藏国府を出て最初の駅場である乗瀬駅については、近年の研究において、練馬区貫井二丁目遺跡が候補地として位置づけられている（湯瀬2015）。仮に武藏国府から練馬区貫井二丁目遺跡まで古代の東海道が直線的に延びていた場合、野川や仙川を横断する必要があり、駅使・駅馬が水を得られる環境である野川中洲北遺跡（18）付近は好条件にあたり、渡河地点であった可能性がある。

中世

中世の小金井市は、市域北部と南部とで様相が異なる。武藏野面上に含まれる市域北部は水資源に極めて乏しく、居住環境には適さなかったためか、遺跡はもとより、資料も発見されていない。他方で、立川面に含まれる市域南部は、野川や湧水などの水源を得ることが可能であるため、集落跡と想定される野川中洲北遺跡（18）や平代坂遺跡（3-1）の他にも、武藏野公園低湿地遺跡（19）、七軒家遺跡（16）、荒牧遺跡（8）等でも遺構や遺物が出土している。

市内では板碑が70基確認されており、造立年が判明している52基のうち、47基が弘安10年（1287）から応永17年（1410）に收まり、残りの板碑5基については、文明8年（1476）から明応4年（1495）に集中する。また、野川中洲北遺跡（18）や平代坂遺跡（3-1）などの集落遺跡の中心年代も、13世紀後半～14世紀（鎌倉時代後期～室町時代前期）にあたり、隣接する武藏野公園低湿地遺跡（19）の出土遺物の年代も15世紀～17世紀初頭と見られる。野川中洲北遺跡（18）と武藏野公園低湿地遺跡（19）は隣接する立地であるものの、年代の断絶が認められ、これらの集落は継続したものではなく、再形成されたものだと思われる。

近世

小金井市域での、近世村落の形成時期は不明だが、近世後期の『新編武藏野風土記』には、享禄年間（1528～1532）頃から開発が始まり村落が形成されていったとあり、中世末から近世初期にかけて、耕作が可能な野川沿いの低地を中心に村が作られ、後の貫井村、小金井村へ発展したものと思われる。貫井村、小金井村は野川の低地から立川面・武藏野面に耕作地を広げていたが、承応2年（1653）に玉川上水が開削され、各分水が許可されると、市域北部の新田開発も加速することになる。

市域内で使用されていた分水は6つあり、最も古いのは明暦三年（1657）に、国分寺村、恋ヶ窪村、貫井村の三村が共同で設置した国分寺村分水（貫井村分水）である。次が元禄9年（1696）頃の開削とされる下小金井村分水であり、貫井村と上小金井村・下小金井村で使用された。さらに、享保改革の武藏野新田開発に伴い、鈴木新田分水、閑野新田分水、下小金井新田分水、梶野新田分水が開削された。

市内の村域は、近世初頭からの集落である貫井村、小金井村の中心域である「本村」、享保改革前に本村によって広げられた新田である「持添え新田」、そして18世紀前半の享保改革の武蔵野新田開発以降に開拓された「新田」に大別される。17世紀末には小金井村は上小金井村・下小金井村の二村に分けられ、小金井村の持添え新田も、上小金井新田・下小金井新田に分けられた。18世紀前半に享保改革により武蔵野新田開発が始まり、新たに市域北部で鈴木新田や梶野新田、関野新田などの開拓が行われるようになる。

市内では、本町六丁目遺跡（23）や中山谷遺跡（5）、荒牧遺跡（8）で区画溝や地境溝などの溝状遺構や道跡、井戸跡などが検出されており、いずれの遺跡も貫井村・小金井村の「本村」に含まれる。本報告の小金井市No.22遺跡（22）では宝永4年（1707）以前に作られた畑跡と考えられる遺構が確認されていることから、享保改革前に新田開発が行われた地域だと考えられ、下小金井村の「持ち添え新田」である下小金井新田に当たると思われる。

近代

小金井市域は明治2年（1869）には品川県に属し、明治4年（1872）に神奈川県北多摩郡に移管される。明治22年（1889）には小金井村・貫井村・梶野新田・関野新田・拾ヶ新田が合併し、さらに下染屋村・押立村・人見村・本多新田・是政村・上石原駅の飛び地が加わり、新たに小金井村が誕生する。この時的小金井村が現在の小金井市の直接のルーツで、昭和12年（1937）の町制施行で小金井町に、同33年（1958）の市制施行に伴い小金井市となる。

明治初期の小金井市内の産業は農業を中心で、江戸期とほぼ変わらない状況であったが、一方で生糸や茶などの輸出品も生産されており、生糸に関する産業は小金井地域の主要な生業として定着していく。

小金井市の郊外化・宅地化の転機となるのは、明治22年（1889）の甲武鉄道開通で、近隣の境（現JR武蔵境駅）と国分寺（現JR国分寺駅）に停車場が設置されると、近世からの名勝であった小金井桜の花見客が急増する。小金井村では、明治43年（1910）には花見客の殺到に対応するため、臨時の仮停車場設置願いを鉄道院に提出していたが、大正11年（1922）以降は、東京都の人口増によって郊外住宅地と交通機関の需要が高まっていることなどから恒常的な停車場の設置を求めるものとなった。その後、大正13年（1924）に觀桜客のための臨時停車場が設置、大正15年（1926）には武蔵小金井駅が開設された。駅の開設以降、小金井村の人口は増加し、10年後の昭和11年（1936）には人口が倍増している。

調査地点周辺にあたる市域北部は、昭和13年（1938）には新宿戸山ヶ原の陸軍技術研究所の移転先として選ばれる。昭和17年（1942）に陸軍航空技術研究所の第三航空研究所が設置され、翌18年（1943）には複数の技術研究所、航空技術研究所を統合した多摩陸軍技術研究所が小金井に新設された。この時に、小金井村分水の流路変更や旧道の分断、新道の敷設など、様々な造成工事が行われており、技術研究所移転の前後では市域北西部の様相は大きく異なる。仙川の流路変更について詳細な記録は残されていないが、技術研究所移転の前後で流路・水源地が西に延びているように見受けられることから、仙川についても分水と同様に、流路の改変が行われていたものと思われる。技術研究所の用地は戦後解放され、調査地点周辺は陸軍共済組織である共榮会により再度耕作地として使

用されることになった。昭和 36 年（1961）には東京都住宅供給公社小金井本町住宅が造成される。仙川の流路は本町住宅造成に先立って改修が行われ、現在の街区・流路が形成された。（高田）

III 層序

調査地点は武蔵野台地の武蔵野面上、仙川上流域の谷底付近に位置する。台地上の標準的な層序とは異なる堆積が見られ、特にローム層については仙川および地下水による水の影響を強く受けていた。層序の観察・記録は、1 区・2 区の北・東壁について行った（第 7 図、図版 2・3）。

本調査における基本的な層序については以下のとおりである。

客土：盛土層。小金井本町住宅造成時に盛土が行われた層で、ローム土を主体とする。

I 層：旧表土層。小金井本町住宅造成以前の昭和 36（1961）年までの表土層である。粗粒で軟質の褐色灰色耕作土で構成される。客土との境では、範囲を明確にできなかったが、一部縮りがよく硬化面が認められる。

II 層：古代～近世相当層。新期テフラ（上條 2012）が含まれる。ただし、本遺跡では再堆積層のみであり、上位層では表土の影響が強く、下位では III 層（富士黒土層）の影響を受け、明確にプライマリーな古代あるいは中世の堆積とは認められず、近世（江戸時代）の層序とみられる。

III 層：縄文時代の遺物包含層。富士黒土層相当だが、黒褐色化が進まず黄褐色を呈する。土器片、石器、被熱礫が検出された。遺物の出土状況から再堆積層である可能性が高い。

IV 層：縄文時代の遺物包含層。富士黒土層相当

V 層：ローム層。いわゆる「水付きローム」で、浸水による粘土化が顕著である。武蔵野台地立川ローム標準層序（以下、標準層序）とは大きく異なるため、一括して V 層とした。土壤分析を実施し、標準層序との対比を行った結果（第 V 章 1 参照）、標準層序 V 層相当（下記 V h 層）以下は水成堆積とみられる。

土層の観察において、各層はさらに細分された。仙川上流域での調査事例は他なく、土層に係る資料が少ないため、今回は現地での観察のとおり、細分された土層断面を掲載する（第 7 図）。各土層注記は以下のとおりである。

I a 層：褐灰 10YR 4/1。耕作土。硬化、粗粒だが、縮り良好で堅緻。ローム粒、炭化粒を含む（ ϕ 1mm 前後、1% 未満）。

I b 層：褐灰 10YR 4/1。耕作土。I a 層と同様だが、微細な焼土粒を含み全体に赤味を帯びる。

I c 層：褐灰 10YR 4/1。耕作土。I a 層と同様。硬化が顕著である。

I d 層：灰黄褐 10YR 4/2。粗粒で、縮りは弱く軟質。炭化物（ ϕ 1mm 前後、1% 未満）と下位の II 層土を斑紋状（ ϕ 10～50mm、2% 未満）に含む。

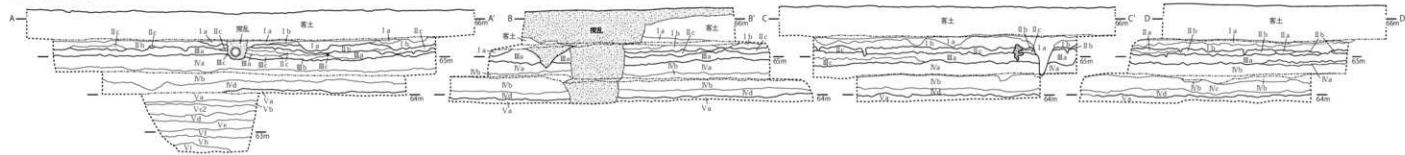
I e 層：灰黄褐 10YR 4/2。軟質で粗粒。II 層土を塊状に多く含む（ ϕ 50mm 前後、5%）。

II a 層：褐灰 10YR 4/1。軟質で粗粒。新期テフラの再堆積土が主体。下位 III 層土を多く含む。微細な黒色土粒、橙色粒を微量含む。層位上面で宝永の火山灰を含む溝が検出された。

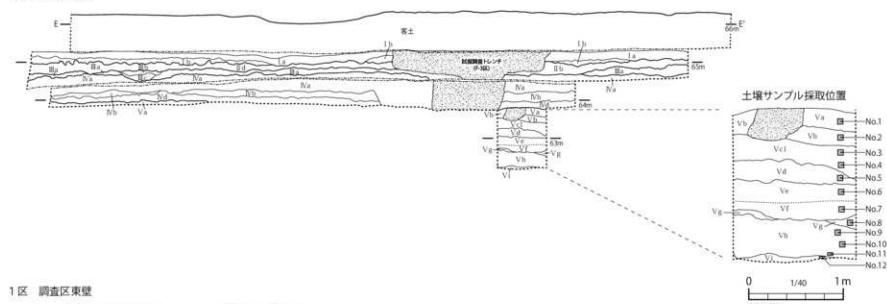
II b 層：灰黄褐 10YR 4/2。II a 層と同様だが、さらに粗粒で、下位 III 層土を多く含み、全体に明るい。

- II c 層：灰黄褐 10YR 4/2。色調は II a 層と II b 層の中間程度。新期テフラの含有量が多く、さらに軟質
- II d 層：褐灰 10YR 4/1。粒子はやや細かい。I 層土（耕作土）の含有が多い。
- III a 層：にぶい黄褐 10YR 5/4。粒子は細かく、わずかに粘性を帯びる。にぶい黄褐色土粒 (10YR 5/4) 主体、斑紋状 (ϕ 10~30mm、20%)。スコリア等の含有物は認められない。
- III b 層：にぶい黄褐 10YR 5/4。III a 層と同様だが、粗粒で軟質
- III c 層：にぶい黄褐 10YR 5/4。III a 層と類似する。縮りがよく硬質。下位IV a 層土をわずかに含む。
- IV a 層：褐灰色 10YR 4/1。粒子が細かく、僅かに粘性を帯びる。下位V 層土が主体だが、III 層土を斑紋上に多く取り込み、全体に明るい。微量の橙色スコリアを含む (ϕ 1mm 未満、1% 未満)。
- IV b 層：褐灰 10YR 4/1。IV 層と比べ、さらに縮りがよく硬質。粘性を帶び、乾燥時にはクラックが顕著である。橙色スコリアを微量に含む (ϕ 1mm 未満、1% 未満、上位IV 層に比べやや多い)。III a 層土を斑紋上に含む (ϕ 30mm、5% 未満)。
- IV c 層：にぶい褐色 7.5YR 5/3。IV b 層と類似するが、全体に赤味を帯びる。軟質で粗粒。IV b 層土を斑紋状 (ϕ 20 ~ 35mm、5%) に含む。
- IV d 層：にぶい黄褐 10YR 5/4。色調は III 層と類似。縮りはよく、粒子は細かい。粘性を強く帯びる。V 層土を斑紋状 (ϕ 25 ~ 40mm、30% 以上) に多く含む。含有物は極めて少なく、赤色スコリアを僅かに含む (ϕ 1mm 未満、1% 未満)。
- V a 層：明黄褐～黄橙 10YR 7/6 ~ 8/6。粗粒で、灰白色土粒 (ϕ 1 ~ 2mm、1%)、硬質の酸化土塊 (ϕ 15 ~ 30mm、5%) を含む。標準層序III 層相当
- V b 層：明黄褐～黄橙 10YR 7/6 ~ 8/6。V a 層と類似。酸化土塊の含有がさらに多く、V 層土粒との混合である。標準層序III 層相当
- V c1 層：明黄褐～黄橙 10YR 7/6 ~ 8/6。硬質の酸化土が主体。粗粒で硬質。僅かに黄橙色土粒 (10YR 8/6) を斑紋状に含む。微量の橙色スコリア (ϕ 1 ~ 3mm、2%) を含む。標準層序IV 層相当
- V c2 層：明黄褐～黄橙 10YR 7/6 ~ 8/6。V c1 層と類似するが、黒色粒子（富士・箱根テフラ？）を含む。灰白土粒 (10YR 8/2)、硬質の酸化土の斑紋状混成土壤。標準層序III ~ IV 層相当
- V d 層：灰白 10YR 8/2。粗粒の灰白色土 (V c2 層と同) が主体。硬質の酸化土塊を多く含む。標準層序IV 層相当
- V e 層：灰白 10YR 8/2・黄橙 10YR 8/6・にぶい褐 7.5YR 5/4。酸化土（にぶい褐 7.5YR 5/4）の水平堆積。間に黄橙色土 (10YR 8/6) が堆積し、わずかに灰白色粒 (10YR 8/2) が含まれる。標準層序IV 層相当
- V f 層：灰白 10YR 8/2・黄橙 10YR 8/6・にぶい褐 7.5YR 5/4。色調は V e 層と同様で、にぶい褐色 (7.5YR 5/4) の酸化土と、灰白色土 (10YR 8/2) が水平堆積する。黒色粒が目立ち (ϕ 2 ~ 5mm、20%)、灰白色粒子は少ない (ϕ 1 ~ 2mm、2%)。下位はやや暗色を帯びる。標準層序V 層相当
- V g 層：灰白 10YR 7/1。灰白色土粒 (10YR 7/1) が主体。黒色土粒を多く含み (ϕ 2 ~ 10mm、

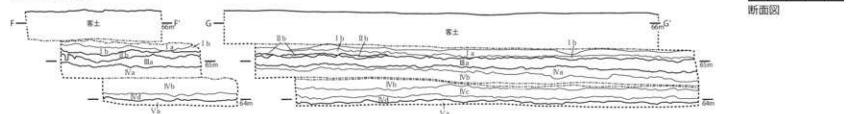
1区 調査区北壁



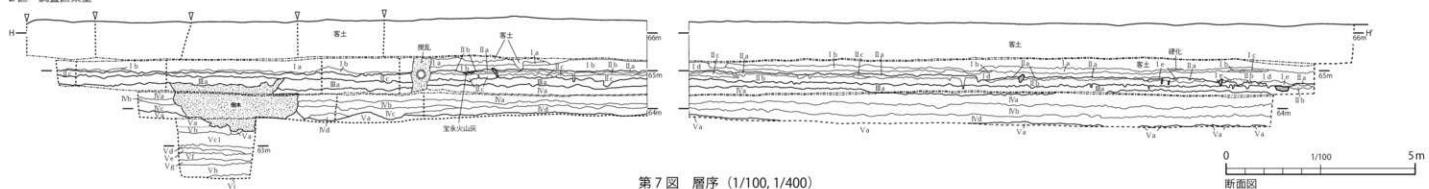
2区 調査区北壁



1区 調査区東壁



2区 調査区東壁



第7図 層序 (1/100, 1/400)

20%)、粘性を強く帯びる。標準層序V層相当
V h層：褐灰 5YR 5/1～6/1。粘土層。上位3～5cmが黒色化し、灰白色粒子、黒色粒子を僅かに含む。
標準層序VI層相当、水成堆積層。

V i層：黄褐色～明黄褐色土 10YR 5/6～6/6 粘性を強く帯び、上層との境に1～2cm層厚で白色粒の水平堆積が見られる。標準層序VI層相当、水成堆積層 (竹花)

前述のように、本調査で確認されたローム層はいわゆる「水付きローム」であり、暗色帶が確認されず、標準層序との対比が困難であった。そのため、整理作業時に土壤分析を実施し、ローム層試料の重鉱物・火山ガラス分析と屈折率測定を行った(第V章1参照)。以下に分析結果の概要を述べる。

2区北東隅付近で、深さ1.5mのトレンチを掘削し、ローム層V a層～V i層に対し、No.1～12のサンプルを採取した。サンプルの採取層序は以下のとおりである(第7図)。

No.1 : V a層	No.4 : V c層下半	No.7 : V f層	No.10 : V h層下半
No.2 : V b層	No.5 : V d層	No.8 : V g層	No.11 : V h層下半
No.3 : V c層上半	No.6 : V e層	No.9 : V h層上半	No.12 : V i層

重鉱物組成分析の結果、本来ローム層の主体をなすカンラン石と斜方輝石が確認されたのはNo.3(V c層上半)・No.7(V g層)のみで、他の層位ではほとんど含まれていなかった。また、No.9・10(V h層)では立川ローム層中にはほとんど含まれることのない角閃石が少量含まれていた。これらの結果は、一般的武藏野台地の立川ロームの重鉱物組成とは大きく異なっており、調査区が谷内部に位置していることから水の影響、おそらく仙川の旧流路や地下水による差異であると考えられる。

No.9・10(V h層)で見られた角閃石は、立川ローム層の母材となる風成塵にはほとんど含まれず、水流によって運ばれた碎屑物に由来すると考えられ、V h層は流水下で形成された層位であると推測される。上位の層は、標準層序の同層位でカンラン石のみを除いた組成に近く、カンラン石が微量しか含まれない理由については、後天的かつ長期的な水の影響、すなわち地下水などの浸水などにより、溶失した可能性が考えられる。一方で、No.7(V f層)ではカンラン石が多く含まれており、この層位ではすでに乾陸上でローム層形成が進行していたと考えられる。

また、今回の分析では、標準層序VI層に見られる始良Tnテフラ(AT)の濃集層準が確認されず、原因としては流水下で形成されたV h層以前に降灰したことによると思われる。したがって、ATの濃集層準がある標準層序VI層付近と対比されるのは、流水下で形成されたV h層以前の可能性が高く、それより上位のV f層は標準層序V層付近と対比される可能性が高い。No.6～4(V e層～V c層下半)では単斜輝石の量比が比較的高く、標準層序IV層に見られる特徴とも合致することから、標準層序IV層付近と対比される可能性が高い。No.1(V a層)では、立川ローム層上部ガラス質テフラ(UG)が検出されており、No.1～3(V a層～V c層上半)は標準層序III層付近と対比される可能性が高い。

以上のことから、標準層序との対比は以下のようになる可能性が高い。

V a層～V c層上半：標準層序のIII層付近 V f・V g層：標準層序のV層付近

V c層下半～V e層：標準層序のIV層付近 V h層～V i層：標準層序のVI層付近

(高田)

IV 遺構と遺物

本調査で確認した遺構・遺物は以下のとおりである（第8図）。

縄文時代 遺構：土坑2基 集石1基

遺物：縄文土器 石器 被熱礫

近世以降 遺構：溝状遺構7条 燃土跡1基 ピット10基 耕作関連遺構多数

遺物：陶磁器 ガラス製品 煉瓦製品

1 縄文時代

1) 遺構

a) 土坑

SK01・02（第9・10図、第3表、図版4・5）

今回の調査では、2区の南壁際、東西2mの間隔で2基の土坑を検出した。検出面の標高は63m前後である。遺構の確認は基本層序Ⅴ層上面で行ったが、2区南壁面の観察から、本来の遺構上面はⅢc層中であったと考えられる。

SK01

2区南壁中央の調査区壁際、標高62.9mで検出された。平面形は上面、底面いずれも不整の楕円形を呈し、規模は上面で長軸1.32m、短軸0.71m、底面で長軸0.98m、短軸0.40mを測る。底面までの深さは0.62mを測る。長軸の方針はN-31.3°-Wを示している。

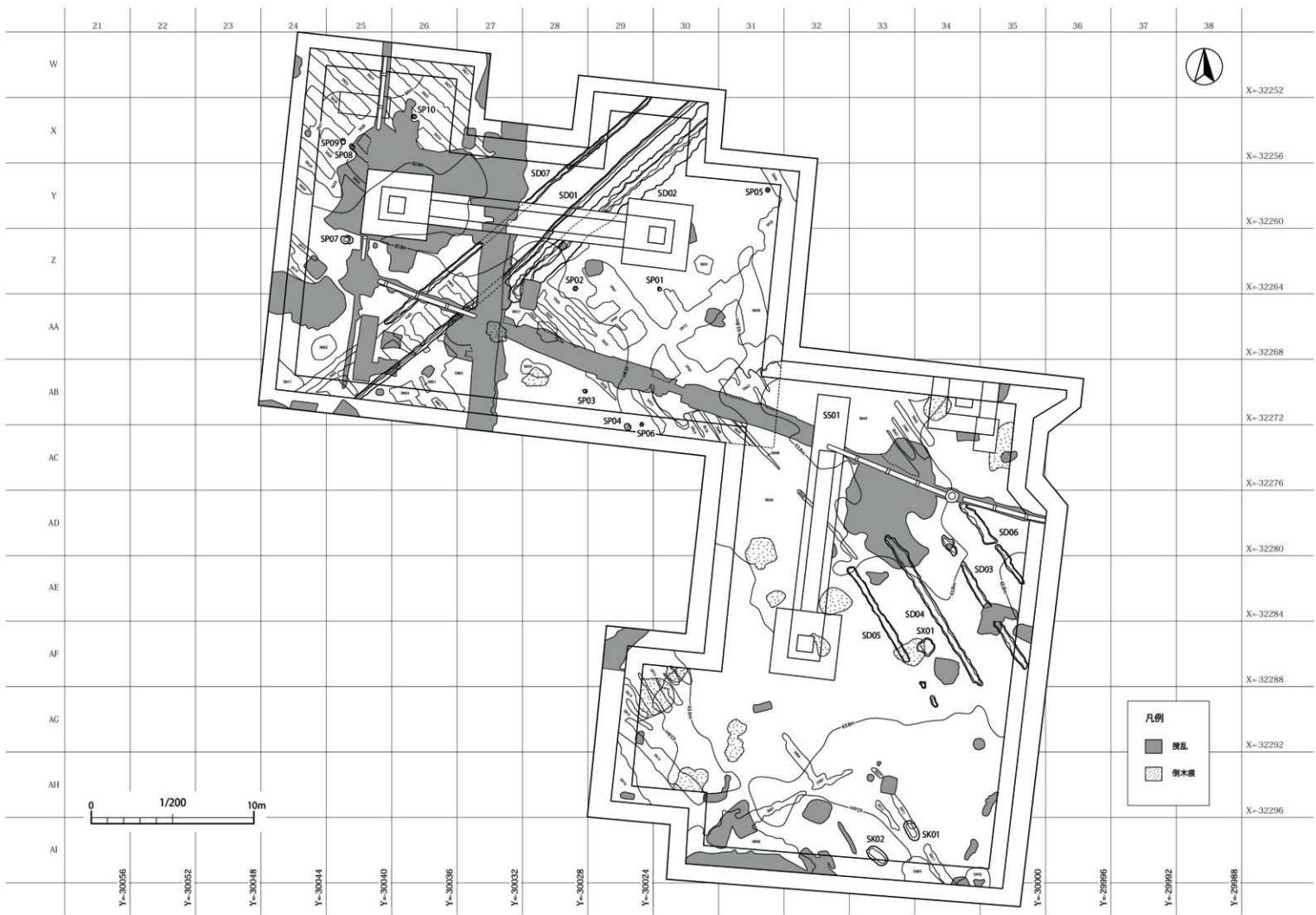
覆土は、基本層序Ⅲ層が主体であり、壁際および底面では、地山である浸水性のローム土が含まれている。遺物は出土していない。

下部施設は底面中央南寄りに構築されている。土坑底面での形状は楕円に近い不整形である。規模は長軸48cm、短軸34.8cm、深さ28.3cm。下部施設底面では円形を基調とした不整形を呈している。規模は長軸方向で23.8cm、短軸方向で22.8cmを測る。杭跡は中央に2ヶ所と、その周囲に円状に7～8ヶ所が確認された。確認された杭跡の内、中央の1ヶ所、周囲の7ヶ所が下部施設底面に達している。下部施設の覆土は、地山のローム土が充填されている。杭跡の覆土は黒褐色で軟質の腐植土である。

SK02

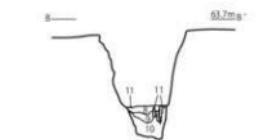
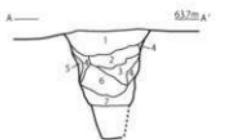
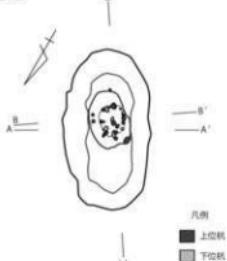
2区南壁中央東よりの調査区壁際で検出された。標高62.5～63.0mの浸水性のローム面で検出した。平面形は上面は不整の楕円形、底面は長方形を基調とした不整形である。規模は上面で長軸0.14m、短軸0.80m、底面で長軸0.12m、短軸0.50mを測る。底面までの深さは0.74mを測る。長軸の方針はN-58°-Wを示している。

覆土は、基本層序Ⅲ層が主体であり、壁際および底面では、地山である浸水性のローム土が含まれている。遺物は出土していない。



第8図 遺構全体図 (1/200)

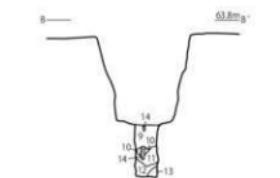
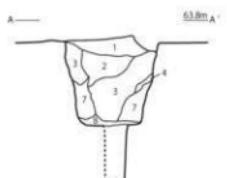
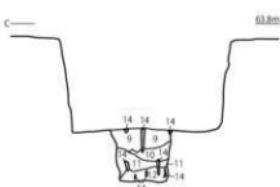
SK01



SK01

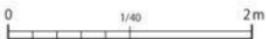
- 1: 黄褐色 10YR 4/1 基本層の黒褐色 (10YR 4/1) の上部。縫合りがよく、粘土をわずかに帯びた A'層と (10YR 4/1) 黃褐色 7.5YR 5/3 の下部 (6.5 ~ 10mm) に含む。
- 2: 黄褐色 10YR 4/1 と相接し、縫合りがよく、A'層との境界が少なくなる。
- 3: 黄褐色 10YR 4/1 と相接し、薄駆けの砂粗い土の含有が多くなる。
- 4: 黄褐色 10YR 5/2 砂駆け状の高い黄褐色土 (10YR 5/2) の内側土は上部、暗灰褐色土 (10YR 4/1) を含む。
- 5: 淡褐色 7.5YR 4/2
- 6: 黄褐色 10YR 4/1 と相接し、薄駆けの砂粗い土 (10YR 5/2) の含有が多くなる。縫合りが弱く、砂を含む部分がある。
- 7: 黄褐色 10YR 5/2 と相接し、高い黄褐色土 (10YR 5/2) の含有が多くなる。縫合りが弱く、砂を含む部分がある。
- 8: 淡褐色 2.5Y 7/3 * 上部には淡褐色のローム土 (10YR 5/2) の縫合りを含み、粘土土 (10YR 4/1) の内側土を除く。白褐色土・粘土土・褐色土 (7.5YR 4/1) 土壌を複数状 (6.5 ~ 20mm, 20%以上) に含む。
- 9: 淡褐色 2.5Y 7/3 * 上部には淡褐色のローム土 (10YR 5/2) の縫合りを含み、粘土土 (10YR 4/1) の内側土を除く。白褐色土・粘土土・褐色土 (7.5YR 4/1) 土壌を複数状 (6.5 ~ 20mm, 20%以上) に含む。
- 10: 淡褐色 2.5Y 7/3 / 淡褐色 7.5Y 4/1 細密な、粘土土 (10YR 3/1) 敷設で粗粒の黒褐色土。土壌の下部細粒化。
- 11: 黑褐色 10YR 3/1 粗粒で粗粒の黒褐色土。土壌の下部細粒化。

SK02

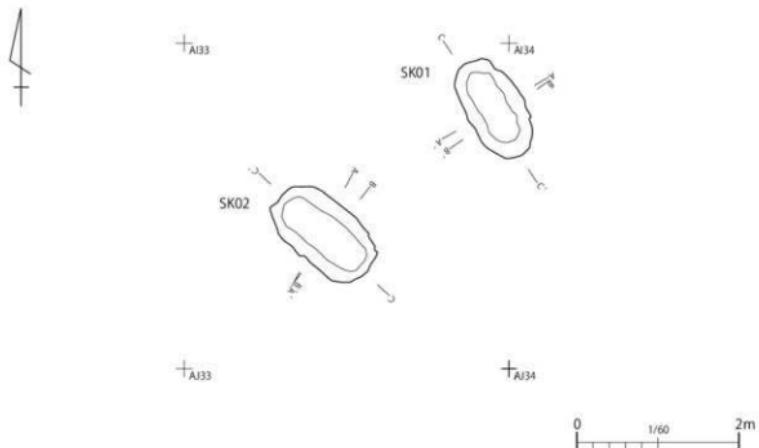


SK02

- 1-7: SK01 と同じ。
- 8: 黄褐色 10YR 5/2 黄褐色土 (7.5YR 4/2) を主体として、褐色土 (10YR 4/1) を多く含む。
- 9: 淡褐色 2.5Y 7/4 淡褐色のローム土層 (地山土) が1.5m、褐色土 (7.5YR 4/1) 土壌を複数状 (6.5 ~ 20mm, 20%以上) に含む。
- 10: 淡褐色 10YR 4/1 粗粒で粗粒の、粘土土 (10YR 4/1) の内側土を除く。白褐色土・粘土土・褐色土 (7.5YR 4/1) 土壌を複数状 (6.5 ~ 20mm, 20%以上) に含む。
- 11: にらい黄褐色 10YR 7/3 縫合りがよく粘性を強く含む。同水性の灰白色ローム土・粘土土 (10YR 4/1) 土壌を複数状で含む。
- 12: にらい黄褐色 10YR 7/3 10と同様であるが粘性を多く含む。
- 13: にらい黄褐色 10YR 7/3 11に類似し、粘化土を多く含む。砂質土を含む。
- 14: 黑褐色 10YR 3/1 粗粒で粗粒の黒褐色土。土壌の下部細粒化。



第9図 SK01・SK02 (1) (1/40)



第10図 SK01・SK02(2)(1/60)

下部施設は底面中央やや南寄りに構築されている。土坑底面での掘り込み形状は三角形に近い不整形であり、底面も同様である。規模は長軸0.48m、短軸0.35m、深さ0.28mで、円形を基調とした不整形を呈している。規模は長軸方向で0.24m、短軸方向で0.23mを測る。杭跡は中央に5ヶ所が長軸ラインに並び、下部施設の壁際に沿って10ヶ所が確認された。いずれも垂直に設置されている。下部施設の覆土は地山ローム土であるが、中間の10層は褐色の腐食土である。杭跡の覆土は10層に類似した腐植土である。

(竹花)

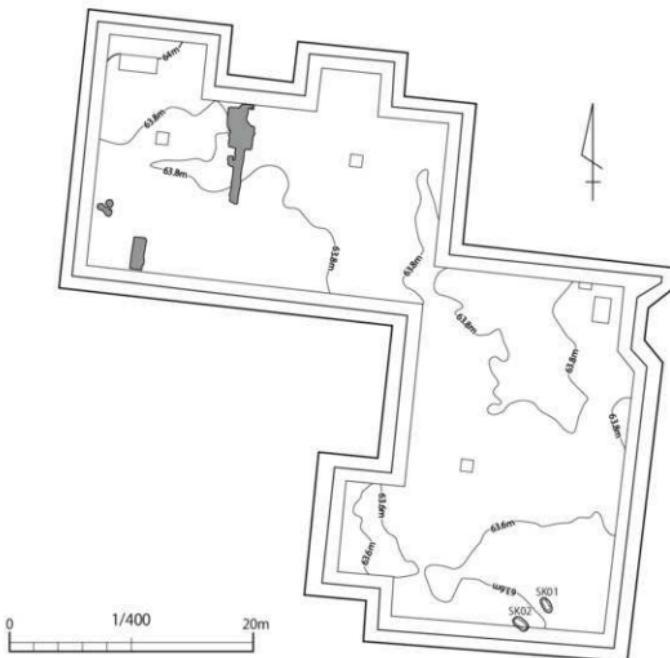
b) 集石

SS01(第12図、第3・4表、図版7)

基本層序Ⅲa層からⅣa層上面にかけて検出された。出土標高は64.7~64.8mである。出土礫数は15点で、全点が被熱により変色している。総重量は4.839gを測る。礫の石材構成は砂岩13点、チャート2点である。15点中2点が接合し、礫の個体数は14点となった。Ⅲa層は再堆積層の可能性が高く、帰属時期は不明である。

第3表 繩文遺構観察表

遺構 番号	挿図 番号	図版 番号	遺構 種類	出土地点		形態	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	主軸方向	備考
				グリッド	検出面						
SK01	9-10	45	土坑	AI33・AI34	Ⅲd層	椭円形	1.32	0.71	0.62	N-31.3°-W	陥し穴
SK02	9-10	45	土坑	AI33	Ⅲd層	椭円形	1.41	0.8	0.74	N-58°-W	陥し穴
SS01	14	7	集石	AB32・AB33・AC33	Ⅲa層	-	-	-	-	-	



第11図 調査区ローム層上面（V層上面）等高線図（1/400）

2) 遺物

本報告書では、本調査で出土した遺物に加え、試掘調査で出土した遺物についても掲載する。本調査で確認された縄文時代の遺物は前期後葉の諸磯c式土器が主体である。試掘調査では諸磯c式に加え、中期後葉の加曾利E式の他に、石器では黒曜石製の石鏃が確認されている。出土遺物の種別点数内訳は以下のとおりである。

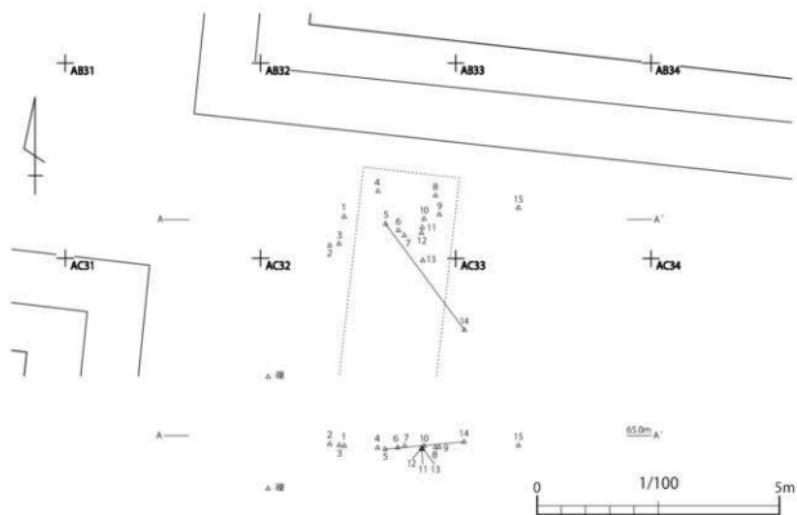
縄文土器：諸磯c式 89点 加曾利E式 7点

石器・礫：石鏃 1点 磚 25点

a) 土器（第13図1~13・第14図、第5表、図版17）

近世以降の歴史から出土したものと第13図2を除き、大半が1区西端に集中して出土している（第14図）。出土層位はすべて基本層序IIIa層で、標高64.8~65.2mの間で出土した。IIIa層は縄文時代の包含層に当たるが、土壤の黒色化が進んでおらず黄褐色を呈する、という特徴および谷内部という立地、そして下記の出土状況から再堆積層である可能性が高いものと考える。

本調査で出土した土器は、前期後葉の諸磯c式 89点と中期後葉の加曾利E式土器 7点だが、同一



第 12 図 SS01 磚出土位置図 (1/100)

第 4 表 磚一覧表

遺物番号	種類	石材	寸法 (mm)			重量	出土地点			備考
			最大長	幅	厚さ		調査K	層位	グリッド	
1	磚	砂岩	76.3	39.2	10.5	26.2	2	III a	AB32	SS01
2	磚	砂岩	52.5	24.7	19.0	26.2	2	III a	AB32	SS01
3	磚	チャート	121.4	101.1	45.7	637.9	2	III a	AB32	SS01
4	磚	砂岩	37.6	32.6	19.1	31.8	2	III a	AB32	SS01
5	磚	砂岩	139.3	73.0	65.7	775.3	2	III a	AB32	SS01 14と接合
6	磚	チャート	138.6	81.9	43.0	742.3	2	III a	AB32	SS01
7	磚	砂岩	78.8	54.7	28.6	127.0	2	III a	AB32	SS01
8	磚	砂岩	38.8	27.2	16.8	16.5	2	III a	AB32	SS01
9	磚	砂岩	79.8	53.4	42.1	233.1	2	III a	AB32	SS01
10	磚	砂岩	54.5	49.2	16.0	51.5	2	III a	AB32	SS01
11	磚	砂岩	103.3	65.7	56.3	567.8	2	III a	AB32	SS01
12	磚	砂岩	71.4	67.6	51.9	72.4	2	III a	AB32	SS01
13	磚	砂岩	123.9	117.3	83.0	1240.2	2	III a	AB32	SS01
14	磚	砂岩	64.2	46.3	13.0	29.2	2	III a	AC33	5と接合
15	磚	砂岩	88.5	58.9	45.2	261.6	2	III a	AB33	SS01
-	磚	砂岩	75.3	57.4	14.4	53.9	1	II b	X26	SN11
-	磚	砂岩	40.8	31.2	28.6	44.7	1	-	AC31	砲瓦
-	磚	砂岩	66.6	35.1	21.9	58.2	1	-	AC31	砲瓦
-	磚	閃緑岩	132.0	113.2	102.3	2572.8	1	III a	Z25	遺構外
-	側片?	頁岩～粘板岩	25.9	11.3	2.7	0.8	1	III a	X25	遺構外
-	磚	チャート	150.6	79.4	47.3	948.3	A-3	III a	Z16	遺構外 試掘時層位：II c2a層
-	磚	砂岩	48.4	30.5	24.9	36.0	D-2	III a	AK26	遺構外 試掘時層位：II c2a層
-	磚	砂岩	55.0	39.1	36.3	67.7	D-2	III a	AK26	遺構外 試掘時層位：II c2a層
-	磚	砂岩	174.0	78.6	74.8	1123.9	E-2	III a	Z29	遺構外 試掘時層位：II c2a層
-	磚	砂岩	129.2	59.2	33.5	339.1	G-2	III a	AF32	遺構外 試掘時層位：II c2a層

個体の破片が多く、個体数は諸磯 c 式が 2 個体、加曾利 E3 式が 1 個体と見られる。出土土器は、数メートル離れた接合例が複数見られた（第 14 図）。諸磯 c 式より下位に加曾利 E 式が出土するなど、遺物の層位差と土器形式の時期差が一致せず、二次堆積の様相を示しており、包含層が再堆積であることを支持するものである。

1～9 は前期後葉の諸磯 c 式の深鉢で、1～6 と 7～9 がそれぞれ同一個体と見られる。1～6 は全体を復元することは叶わなかったが、残存する各部位から判断すると、胴部下半で屈曲してからやや外反気味に立ち上がり、頸部付近で一旦膨らんだ後に、口縁部がキャリバー上に屈曲して開く器形を呈するものと思われる。各部位の文様は観察所見から、同一の半截竹管を施文具として用いたものと判断する。文様の詳細は以下のとおりである。1 の口頸部は、平坦な口唇部に半截竹管の押し引きによる結節状沈線を加え、口縁部に地文として横位の矢羽根状沈線文を施し、頸部を 2～4 条の平行沈線で区画する。地文上には結節浮線文とボタン状貼付文を付加する。結節浮線文は 1 組 5 条単位で施されており、口縁部と頸部では施文位置をずらしている。ボタン状貼付文は 1 組 2 単位で口縁部に 2 段、頸部に 1 段を巡らす。口縁部では 1 組が 3～9mm とある程度間隔を置いて施文するが、頸部では 1mm 以下と近接する。器面内壁は横ナデの調整が見られる。2 は頸部直下に該当する。地文に横位の矢羽根状沈線文を持ち、3 条の結節状浮線文と半截竹管を押捺したボタン状貼付文を付加する。器面内壁は横ナデの調整が見られる。3～6 は胴部上半から下半の破片で、横位・縦位に加えて矢羽根状の集合沈線文を密に充填している。器面内壁は横ナデの調整が見られる。

7～9 はいずれも胴部破片であり、胴部下半で緩やかに屈曲し、胴部上半で外反しながら大きく開く器形を呈するものと思われる。幅の狭い半截竹管による平行沈線文が一定間隔で重複する。器面内壁は横ナデの調整が見られるが、土器片下部では斜位に入り込み、乱れる。

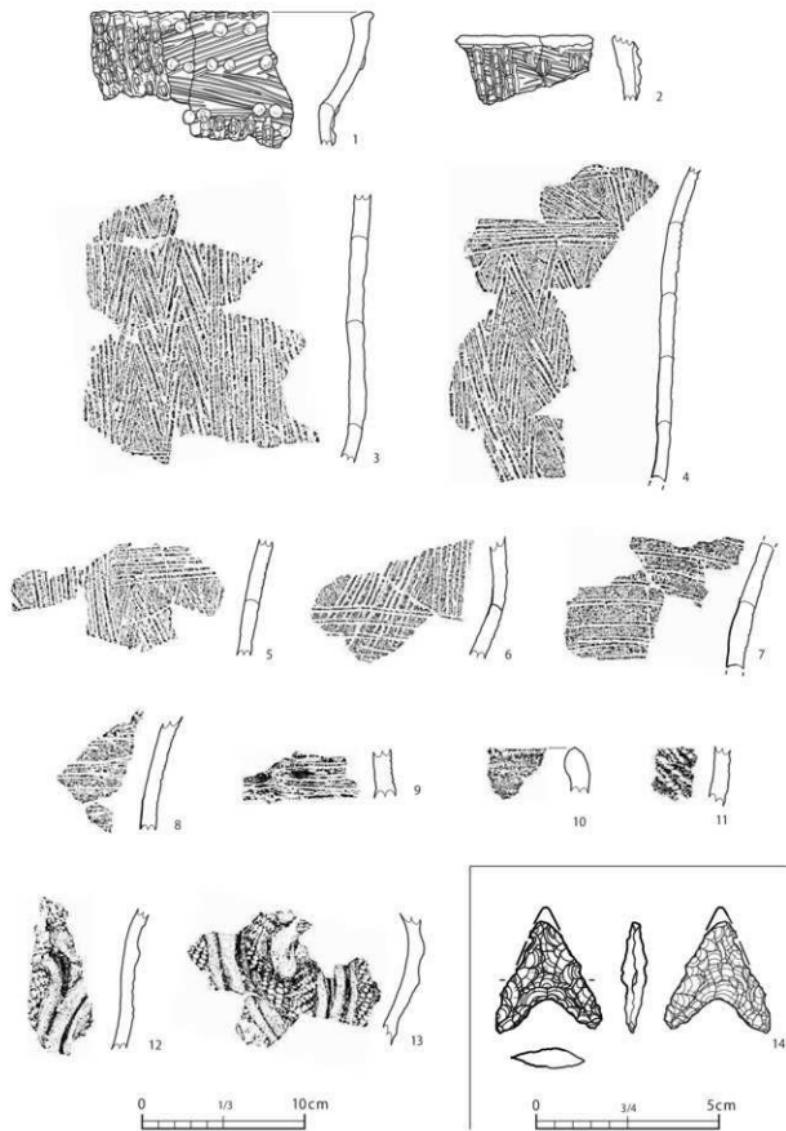
10～13 は縄文時代中期後葉の加曾利 E 式の深鉢である。10 は口縁部文様帶が認められないことから判断すれば、おそらく加曾利 E 3 式の口縁部片と思われ、口唇部に横ナデの調整のみが見られる。11 の胴部には、斜位の単節 RL の縄文が認められる。

12・13 は胎土、施文の様子から加曾利 E 3 式の同一個体と判断する。12 が胴部上半片、13 が胴部下半片であり、胴部半ばで屈曲し、下半で大きく膨らむ器形を呈するものと思われる。いずれも両脇をナデた隆帯施文による J 字状および曲線状区画を配し、区画内部が縦位・斜位の単節 RL 縄文で充填される。器面内壁は横ナデの調整が見られる。

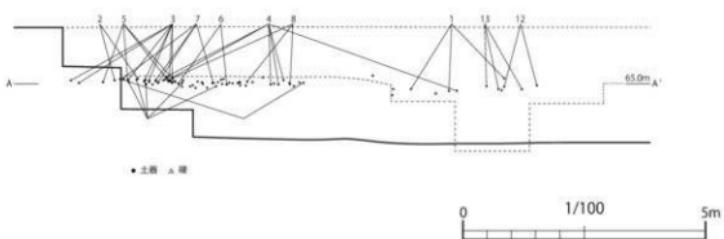
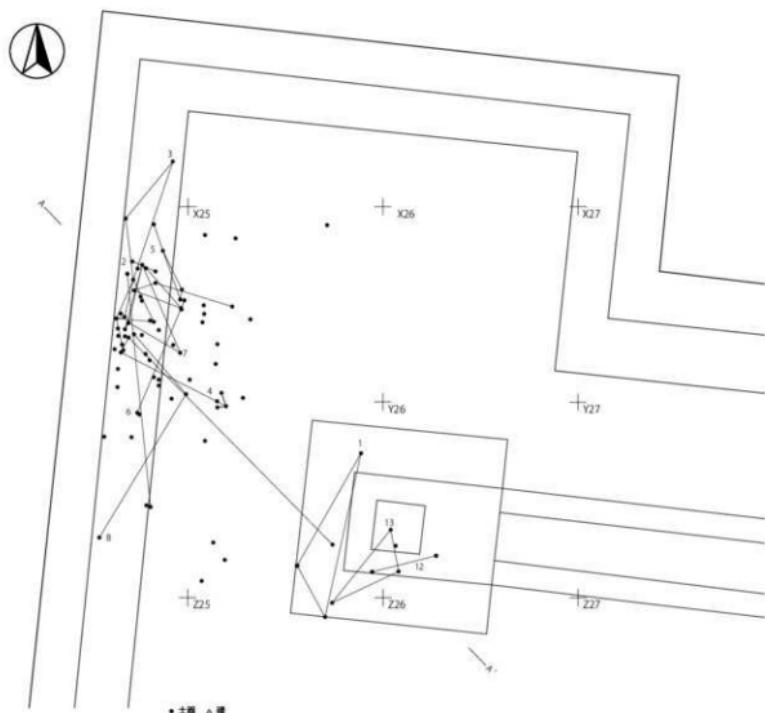
b) 石器（第 13 図 14、第 6 表、図版 17）

今回確認された石器は、試掘調査で出土した黒曜石製の石鏃 1 点のみである。基本層序Ⅲ a 層、グリッド Y28（試掘坑 E-2 区）から出土した。出土標高は 64.9m である。石材は黒曜石で、基部に抉りを加えた凹基鏃のタイプである。現存部の最大長 31.0mm、最大幅 30.0mm、最大厚 5.5mm を測り、重さ 2.4g で、長さ：幅がほぼ 1 対 1 の形状をとる。先端部および側縁部の一端に欠損が見られる。表裏両面から側縁調整がされており、緩やかな鋸歯状を呈する。出土層位であるⅢ a 層は再堆積層の可能性が高く、石鏃の帰属時期はその詳細を確定できないものの、出土土器を考慮すれば、おそらく前期後半から中期後半の所産であると思われる。

（高田）



第13図 縄文時代の遺物 (1/3, 3/4)



第14図 繩文土器分布図 (1/100)

第5表 繩文土器観察表

掃岡 図版	出土 地点	型式	器種	部位	文様	胎土	焼成	色調	重量 (g)	備考
12-1 17-1	Y25 Z25	諸職 c	深鉢	口縁部 ～頸部	口縁に平裁竹管押し引きによる結節状沈線。地文に横位の矢羽根状沈線文。頸部を2-4条の平行沈線で区画。地文上に2個1単位3例のボタン状貼付文。鰐形浮線文は継位で5条1単位で備す。	長石 砂粒 白色粒子	普通	内：7.5YR 6/4 外：10YR 7/3	128.9	一部試掘E-I区から出土
12-2 17-2	X24	諸職 c	深鉢	頸部 直下	地文に平裁竹管押し引きによる結節状沈線文。ボタン状貼付文によると2条の結節状平行沈線文。ボタン状貼付文に結節文を備す。	長石 石英 黒雲母 白色粒子	普通	内：10YR 7/3 外：10YR 6/4	42.9	
12-3 17-3	W24 X24	諸職 c	深鉢	胴上 ～下部	平裁竹管による継位および矢羽根状の集合沈線文を充填。最下部は横位の平行沈線文で区画。	長石 石英 黒雲母	普通	内：7.5YR 6/4 外：7.5YR 7/4	233.5	一部竪開溝から出土 堅果殻混入、不明程度の丘積あり
12-4 17-4	X24 X25 Y25 Y25	諸職 c	深鉢	胴上 ～下部	横位 継位および矢羽根状の集合沈線文を充填。	長石 石英 黒雲母 白色粒子	普通	内：7.5YR 6/4 外：10YR 6/2	183.4	一部竪開溝、試掘E-I区出土
12-5 17-5	X24	諸職 c	深鉢	胴上部	横位 継位および矢羽根状の集合沈線文を充填。	長石 石英 黒雲母	良好	内：10YR 6/2 外：10YR 7/2	76.0	一部竪開溝から出土
12-6 17-6	X24 Y24	諸職 c	深鉢	胴下部	横位 継位および斜位の集合沈線文を充填。	長石 石英 黒雲母	普通	内：7.5YR 6/4 外：7.5YR 6/6	57.1	
12-7 17-7	X24	諸職 c	深鉢	胴部	平裁竹管による平行沈線。	長石 石英 黒雲母	普通	内：5YR 5/4 外：5YR 6/6	71.5	一部竪開溝から出土 ハガレ等の器面の荒れ
12-8 17-8	X24 Y24	諸職 c	深鉢	胴部	平裁竹管による平行沈線。	砂粒 石英	普通	内：7.5YR 6/4 外：5YR 6/6	28.0	
12-9 17-9	X24	諸職 c	深鉢	頸部	平裁竹管による平行沈線。	長石 石英 砂粒 白色粒子	良好	内：5YR 6/6 外：5YR 5/6	31.3	竪開溝から出土
12-10 17-10	AD32	加曾利 E3?		口縁部	ナデのみ。	砂粒	普通	内：5YR 5/4 外：10YR 6/4	16.9	試掘G-1区から出土
12-11 17-11	W17	加曾利 E		胴部	單節縞文 R.	黒雲母 石英 砂粒	普通	内：7.5YR 6/3 外：7.5YR 6/4	14.5	試掘A-1区から出土 剥離、摩耗等の器面の荒れ
12-12 17-12	Y25 Y26	加曾利 E3	深鉢	胴部 下部	両面ナテ隕帶による曲線文の区画。区画内に單節縞文 RL を充填。	長石 砂粒	良好	内：2.5YR 5/4 外：2.5YR 5/6	37.0	試掘E-I区出土
12-13 17-13	Y26 Z25	加曾利 E3	深鉢	胴部 上半	J字状の隕帶による区画。区画内に單節縞文 RL を充填。	長石 砂粒	良好	内：2.5YR 4/4 外：5YR 6/6	83.7	試掘E-I区出土

第6表 繩文石器一覧表

掃岡 図版	種類	石材	寸法 (mm)			重量 g	調査区	層位	Yマーク	遺構 番号	備考
			最大長	最大幅	最大厚						
12-14 17-14	石器	黒曜石	31.0	30.0	5.5	2.4	E-2	III a	Y28	遺構外	試掘時層位：II c2a層

2 近世以降

調査地点周辺は玉川上水が開削された承応2年（1653）、小金井分水が許可された元禄9年（1696）頃から新田開発が始まり、昭和36年（1961）に小金井本町住宅が造成されるまで基本的に耕作地として使用され続けた。昭和15年（1940）・17年（1942）の二度の強制買収により、終戦まで陸軍技術研究所の用地に含まれるが、技術研究所に関わる建物等の痕跡は見られなかった。調査区内は近世および近代の耕作による削平は受けているものの、団地造成による削平はほとんど受けおらず、小金井本町住宅造成直前までの旧表土（1層）が残されていた。

検出遺構は近世から近代にかけての耕作関連遺構と、耕作地の区画や旧道に関連する遺構を中心である。遺物は、近世から昭和30年代までのものが確認された。

1) 遺構

a) 溝状遺構

SD01・02（第15・16図、第7表、図版10・11）

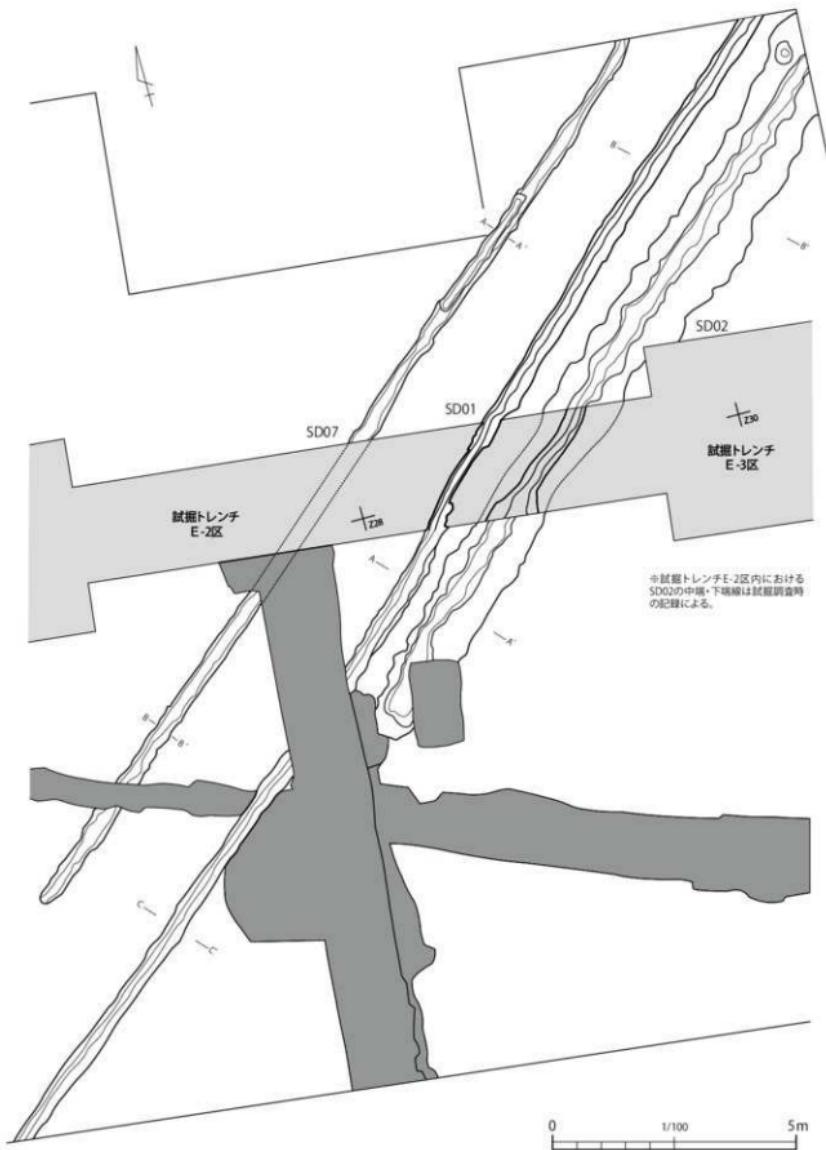
SD01・02いずれも、1区の中央付近を北東-南西軸に通る溝状遺構で、II層上面から調査区を斜めに縦断するように検出され、他の溝状遺構（歛間溝：SD03～06・SN01～48）と直行する方向に延びる。1区北部（SPB-B'）と比べ、1区中央（SPA-A'）・南部（SPC-C'）は全体的にII層上面が0.1～0.2m程度削平されており、SD02は1区中央付近で消失する。明治8年（1875）作成の『貫井村全国坂上』に描かれた、貫井村と小金井村を区切る「村境界通」と平行し、ほぼ一致する位置で確認されたことから、「村境界通」や付随する区画溝、境堀に関連する溝であると考えられる。

SD01

II b層上面で検出された。主軸方向はN-41.5°-Eをとる。1区を斜めに縦断し、端部は調査区外にあるため、全体の形状は不明である。検出された範囲での全長は約28m、幅は上端0.3～0.5m、下端0.09～0.2m、検出面からの深さは0.55～0.84mを測る。断面形態は上部がやや開いた細長いU字状を呈する。覆土は3あるいは4層に分けられ、上位と下位に大別される。上位はやや砂質あるいはロームブロックの混ざる耕作土由来と思われる覆土である。下位は富士黒土層を由來とした黒褐色土がブロック状に堆積しており、壁面の崩落によるものと考えられる。調査区で確認された他の溝状遺構と比べ、突出して深く掘られていることから、他の溝状遺構とは異なる目的で作られた溝であると考えられる。また『貫井村全国坂上』（附図2）記載の「村境界通」と平行・隣接していることから、貫井村と小金井村の間に作られた区画溝あるいは境堀であると考えられる。

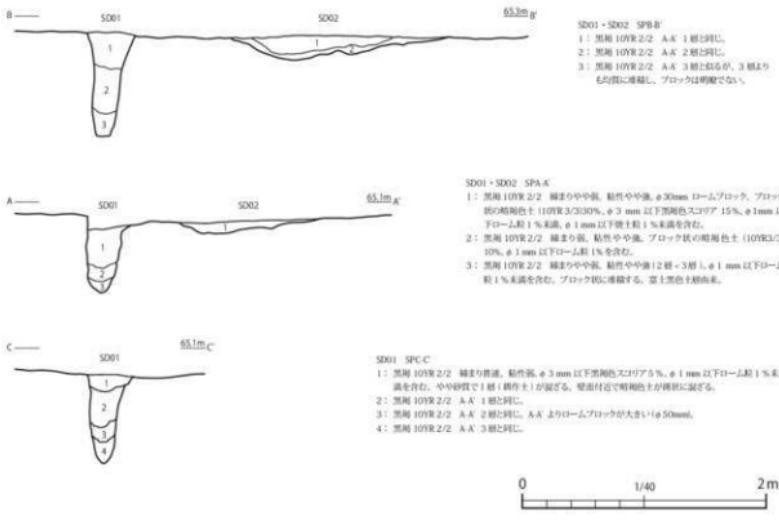
SD02

II b層上面で検出された。主軸方向はN-41.5°-Eをとる。SD01に平行し、1区北壁から中央付近まで延びる。上端、下端いずれのラインも直線的ではなく、全体的に凹凸をなす。検出された範囲の全長は約17m、幅は0.9-1.7m、検出面からの深さは0.1-0.12mを測る。断面形は浅く緩やかな台形状を呈する。覆土はSD01上位層と共通しており、耕作土由来と思われる。後世の削平により、1



第15図 SD01・02・07(1) (1/100)

SD01・SD02



SD07



第 16 図 SD01・02・07 (2) (1/40, 1/20)

区中央のグリッド Z27 付近で消失する。SD01 と同様に『貫井村全図 坂上』(附図 2) 記載の「村境界通」に関連する溝と考えられる。検出位置から旧道にあたる可能性もあるが、路面に相当する硬化面は確認されなかった。覆土からは近世の德利が出土している(第 19 図 1)。
(高田)

SD03 ~ 06 (第 17 図、第 7 表、図版 8~10)

2 区の中央東側、II 層土上面で検出された同一の覆土を持つ 4 条の溝状遺構である。SD03 ~ 06 の覆土上位に宝永 4 年(1707)の富士山噴火に由来するとみられる火山灰が検出されていること(Ⅴ 章 1 参照)から、それ以前に作られた溝であると考えられる。また溝の間隔、方位も同様であることから、畝間溝とみられる。

SD03

2 区の中央東寄りで検出された。4 条のうちの中央東側に当たる。SD04 との間隔は 2.44m である。検出面は基本層序 II a 層上面である。長軸の方位は N-32.7°-W をとり、規模は、長さ 9.6 m、幅 0.52m ~ 0.28m で、検出面からの深さは 0.06 ~ 0.16 m を測る。残存部分での断面形状は浅く、台形を呈する。覆土上層に宝永 4 年(1707)の富士山噴火の火山灰が堆積している。

SD04

2 区の中央で検出された。4 条のうちの中央西側に当たる。SD03 との間隔は 2.44m である。検出面は基本層序 II a 層上面である。長軸の方位は N-32.7°-W をとり、規模は長さ 10.9 m、幅 0.82m ~ 0.3m で、検出面からの深さは 0.1 ~ 0.13 m を測る。断面形状は浅く、皿状を呈する。覆土上層に宝永 4 年(1707)の富士山噴火の火山灰が堆積している。

SD05

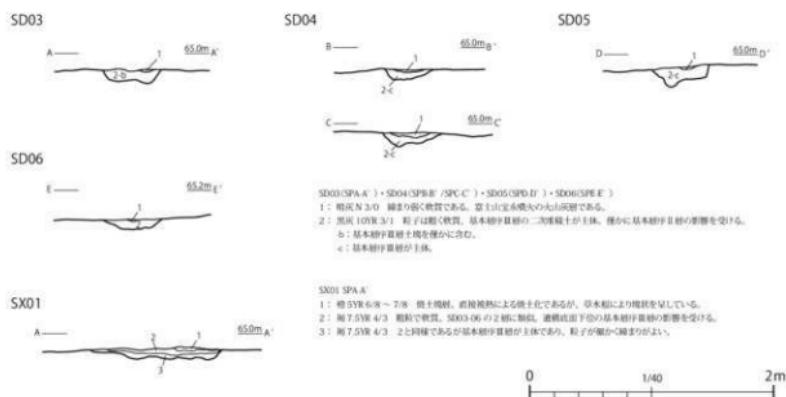
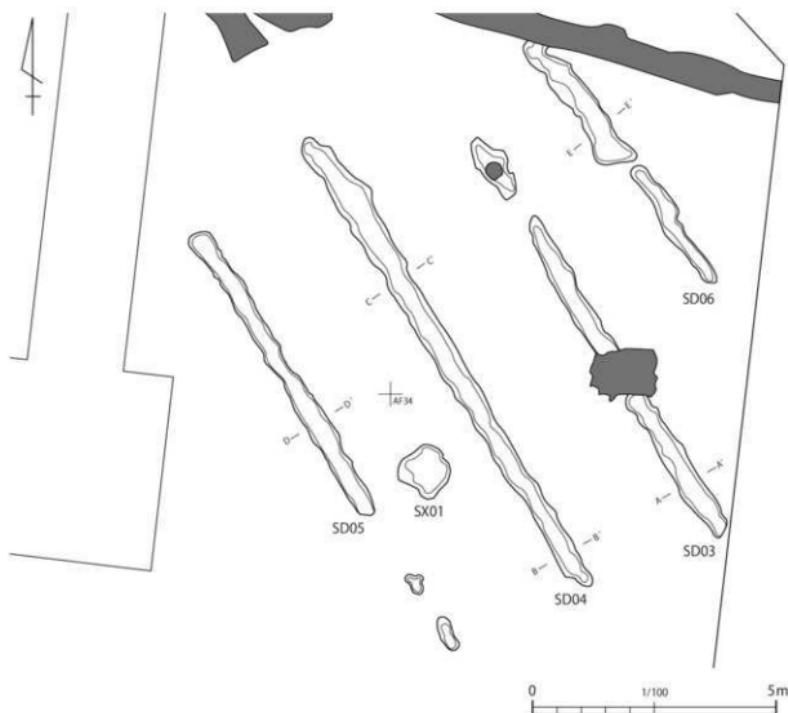
2 区の中央で検出された。4 条のうちの最西端に当たり、SD04 との間隔は 2.5m である。検出面は基本層序 II a 層上面である。長軸の方位は N-33°-W をとり、規模は長さ 10.08 m、幅 0.52m ~ 0.22m で、検出面からの深さは 0.06 ~ 0.16 m を測る。断面形状は浅く、台形を呈する。覆土上層に宝永 4 年(1707)の富士山噴火の火山灰が堆積している。

SD06

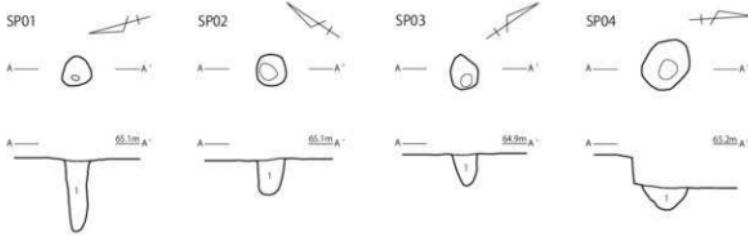
2 区の東壁際で検出された。検出面は基本層序 II a 層上面である。長軸の方位は N-37°-W をとり、部分的に途切れるが、規模は長さ 6.28 m、幅 0.67m ~ 0.3m で、検出面からの深さは 0.06 ~ 0.1 m を測る。残存部分での断面形状は浅い台形を呈する。覆土上層に宝永 4 年(1707)の富士山噴火の火山灰が堆積している。
(竹花)

SD07 (第 15・16 図、第 7 表、図版 11・12)

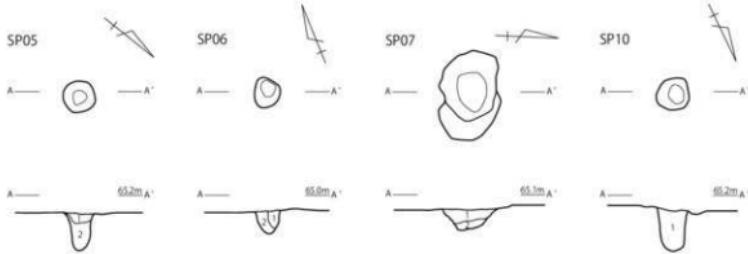
I b 層中で検出された。主軸方向は N-41.5°-E をとる。検出された主軸長は 21.4m、短軸幅 0.2 ~ 0.5m、確認面からの深さは 0.09 ~ 0.18m を測る。断面形は浅い緩やかな台形状を呈する。一部



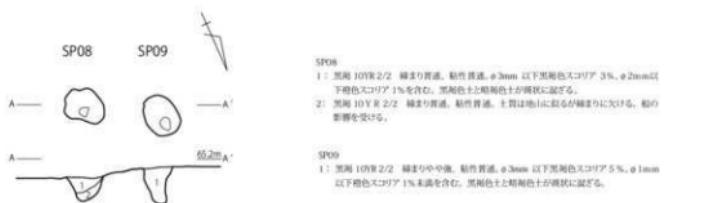
第17図 SD03～06・SX01 (1/100, 1/40)



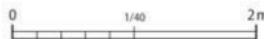
- SP01**
1: 黒褐10YR 2/1 締まり普通、粘性普通、 $\phi 3mm$ 以下黒褐色スコリア1%、 $\phi 1mm$ 以下ローム1%を含む。基木植生1種(樹木)か。
- SP02**
1: 黒褐10YR 2/2 締まり普通、粘性普通、 $\phi 3mm$ 以下黒褐色スコリア8%、 $\phi 1mm$ 以下ローム1%を含む。暗褐色土が斑状に混ざる。
- SP03**
1: 黒褐10YR 2/2 締まりやや弱、粘性普通、 $\phi 3mm$ 以下黒褐色スコリア20%、 $\phi 3mm$ 以下ローム1%を含む。未溝を含む。
- SP04**
1: 黒褐10YR 2/2 締まり普通、粘性やや強、 $\phi 1mm$ 以下黒褐色スコリア3%、 $\phi 1mm$ 以下ローム1%を含む。再堆積ロームを斑状に含む。



- SP05**
1: 黒褐10YR 2/2 締まり普通、粘性普通、 $\phi 3mm$ 以下黒褐色スコリア5%、 $\phi 1mm$ 以下暗褐色スコリア1%を含む。暗褐色土が斑状に混ざる。
2: 黑褐10YR 2/3 締まりやや弱、粘性やや強、 $\phi 1mm$ 以下ローム1%未溝、 $\phi 1mm$ 以下暗褐色スコリア1%未溝を含む。
- SP06**
1: 黒褐10YR 2/2 締まり普通、粘性普通、 $\phi 1mm$ 以下黒褐色スコリア1%、 $\phi 1mm$ 以下ローム1%を含む。
2: 黑褐10YR 2/3 締まり普通、粘性普通、 $\phi 1mm$ 以下黒褐色スコリア1%、 $\phi 1mm$ 以下ローム1%を含む。再堆積ロームを斑状に含む。
- SP07**
1: 黒褐10YR 2/2 締まり普通、粘性普通、 $\phi 3mm$ 以下黒褐色スコリア5%、 $\phi 1mm$ 以下ローム1%、ブロッサムの再堆積ロームを含む。
2: 黑褐10YR 2/3 締まり普通、粘性普通、 $\phi 3mm$ 以下黒褐色スコリア1%未溝を含む。再堆積ロームは黒褐色土(1種)が斑状に混ざる。
- SP10**



- SP08**
1: 黒褐10YR 2/2 締まり普通、粘性普通、 $\phi 3mm$ 以下黒褐色スコリア3%、 $\phi 2mm$ 以下暗褐色スコリア1%を含む。黒褐色土と暗褐色土が斑状に混ざる。
2: 黑褐10YR 2/2 締まり普通、粘性普通、土質は地山に似るが締まりに欠ける、他の影響を受けない。
- SP09**
1: 黑褐10YR 2/2 締まりやや強、粘性普通、 $\phi 3mm$ 以下黒褐色スコリア5%、 $\phi 1mm$ 以下暗褐色スコリア1%未溝を含む。黒褐色土と暗褐色土が斑状に混ざる。



第18図 SP01-10 (1/40)

(SPA-A'周辺)では、別の溝状の掘り方との切りが見られるが、壁面を共有していることから同一の遺構であると認識している。覆土には耕作土が混ざり、耕作に関連する遺構と思われる。覆土からは、近世および近代の遺物が出土した。他の歓間溝と比較して遺物が多く検出され、また近世の遺物も出土していることから、比較的長期間使用されたものと思われる。また、区画溝や境堀と考えられるSD01・02に隣接・平行していることからも、歓間溝ではなく畠の畦畔である可能性がうかがわれる。

SN01～48（第8図、第7表）

II～III a層にかけて検出された。概ね溝状を呈し、歓間溝と思われる。上位の耕作土との境界が判別しがたく、面状に広がる箇所も多かったため、溝状遺構とは区別し、耕作関連遺構（SN）とした。覆土は耕作土で充填されており、歓間溝同士の切りはは判別できなかった。大半がSD01・02と直行しており、長軸は概ねN-30°-WからN-50°-Wをとる。そのため、SD01・02、すなわち「村境界通」が作られた以降の区画に沿って使用された畠と考えられる。

b) 焼土跡

SX01（第17図、第7表、図版10）

II a層上面、SD04・05のほぼ中間位置で検出された。平面形は不整方形を呈し、規模は長軸1.13m、短軸1.07m、検出面からの深さは0.1mを測る。覆土は上位に焼土塊を含み、下位はSD03～06の覆土と類似する。SD04・05のほぼ中間位置で検出された。覆土の類似からSD03～06と同時期の所産であると思われるが、覆土に明瞭な宝永火山灰は確認されなかった。

c) ピット

SP01～10（第8・18図、第7表、図版12～14）

いずれもIII a層で検出された。平面形は円形、楕円形、不整形を呈する。やや大型であるSP07を除き、全体的に規模は似ており、直径0.3m前後、深さ0.25m前後の規模である。I層あるいはII層由来の覆土を持ち、近世～近代にかけての耕作地に関連するピットと思われる。（高田）

2) 遺物（第19図、第8～10表、図版18）

a) 陶器・磁器（第19図、第8表）

近世の遺物は7点出土し、全点掲載した。近代の遺物は刻印・エンボス印等を持つ文字資料を抽出し、6点掲載した。遺構出土遺物の内訳はSD02出土1点、SD07出土5点で、他は歓間溝（SN）、耕作土（I層）、客土、攪乱から出土した。（高田）

第19図1はSD02出土の陶器徳利の底部片。轆轤成形で、外面には鉄軸が施される。胎土はやや砂粒を含むが、精良で、灰色を呈する。瀬戸・美濃窯産で、年代は18世紀後半から19世紀前半である。

2はSD07出土の陶器擂鉢の口縁部片。胎土はやや白色砂粒を含むが精良である。外面は暗赤褐色、内面は赤褐色を呈する。口縁部外面は3cm程の縁帯状をなし、内面は突帯を有する。体部内面に卸し目が施される。泉州堺産で、18世紀代と考えられる。

第7表 近世・近代遺構観察表

遺構番号	調査番号	回転番号	遺構種類	時期	出土地点		形態	回転(m)	知輪(m)	深さ(m)	長軸方向	
					調査区	グリッド						
SD01	15-16	10-11	溝状遺構	近世以降	I K	X29-30,Y28-29,Z27-28,A26-27,B25-26	II b	長梢円形	27.85	0.3-0.9	0.55-0.84	N-41.5°-E
SD02	15-16	10-11	溝状遺構	近世以降	I K	X29-30,Y28-29,Z27-28,A26-27,B25-26	II b	長梢円形	17	0.9-1.7	0.18	N-41.5°-E
SD03	17	8-9	溝状遺構	近世	2 K	AD34,AE34,AF35	II a	長梢円形	9.6	0.3-0.7	0.1-0.12	N-32.7°-W
SD04	17	8-9	溝状遺構	近世	2 K	AD33,AE33,AF34,AF35	II a	長梢円形	10.9	0.3-0.8	0.09	N-32.7°-W
SD05	17	8-9	溝状遺構	近世	2 K	AE32,-34,AF33,AG34	II a	長梢円形	10.1	0.25-0.5	0.12-0.19	N-33°-W
SD06	17	8-9	溝状遺構	近世	2 K	AD34-35,AE35	II a	長梢円形	6.25	0.3-0.7	0.09	N-37°-W
SD07	15-16	10-11	溝状遺構	近世以降	I K	Z26-27,A25-26	I b	長梢円形	21.4	0.2-0.5	0.09-0.18	N-41.5°-E
SN01	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AB26	II	不整形	2.38	0.49	-	N-37.4°-W
SN02	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AA24	II	不整形	1.65	1.25	-	N-53.9°-E
SN03	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AA26-27,AB26-27	II	不整形	4.74	2.13	-	N-36.5°-W
SN04	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AB26	II	不整形	1.55	1.45	-	N-32.5°-W
SN05	8	-	礎間溝	近世以降	I K	Z26,A25-27,B24-26	II	不整形	13.55	2.45	-	N-51.2°-E
SN06	8	-	礎間溝	近世以降	2 K	AH31,AL30-32	III a	不整形	7.79	1.36	-	N-67.8°-W
SN07	8	-	礎間溝	近世以降	2 K	AH31,AL30-32	III a	不整形	7.38	0.80	-	N-63.2°-E
SN08	8	-	礎間溝	近世以降	2 K	AH31,32,AL31	III a	不整形	3.37	0.62	-	N-35.3°-W
SN09	8	-	礎間溝	近世以降	2 K	AI33,34	III a	不整形	6.22	1.68	-	N-31.8°-W
SN10	8	-	礎間溝	近世以降	2 K	AI34,35	III a	不整形	1.96	1.20	-	N-13.5°-E
SN11	8	-	礎間溝	近世以降	2 K	AH33,AL33,34	III a	不整形	8.61	0.55	-	N-32.7°-W
SN12	8	-	礎間溝	近世以降	2 K	AH33,AL33,34	III a	不整形	2.27	0.38	-	N-36.2°-W
SN13	8	-	礎間溝	近世以降	2 K	AF29,30,AG29-30	III a	不整形	4.79	3.43	-	N-31.3°-W
SN14	8	-	礎間溝	近世以降	2 K	AF29,AG29	III a	不整形	2.34	1.10	-	N-56.0°-W
SN15	8	-	礎間溝	近世以降	2 K	AG29,AH29-30	III a	不整形	7.10	1.11	-	N-43.9°-W
SN16	8	-	礎間溝	近世以降	2 K	AG,29,AH29-30	III a	不整形	3.90	1.85	-	N-28.5°-W
SN17	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AB24	II	不整形	1.63	1.48	-	N-51.4°-W
SN18	8	-	礎間溝	近世以降	I K	Z24	II	不整形	1.80	0.55	-	N-48.1°-W
SN19	8	-	礎間溝	近世以降	I K	Z24	II	不整形	2.11	0.33	-	N-48.5°-W
SN20	8	-	礎間溝	近世以降	I K	X25,Y25	II	不整形	5.57	0.73	-	N-44.3°-E
SN21	8	-	礎間溝	近世以降	I K	W26-27	II b	不整形	1.92	0.43	-	N-41.9°-W
SN22	8	-	礎間溝	近世以降	I K	W26-27,X26	II b	不整形	4.78	0.58	-	N-47.2°-W
SN23	8	-	礎間溝	近世以降	I K	W26-27,X26	II b	不整形	6.26	0.70	-	N-47.0°-W
SN24	8	-	礎間溝	近世以降	I K	W25-26,X25-26	II b	不整形	8.97	0.59	-	N-48.0°-W
SN25	8	-	礎間溝	近世以降	I K	W25-26,X25-26	II b	不整形	5.34	0.51	-	N-43.4°-W
SN26	8	-	礎間溝	近世以降	I K	W24,X24,25	II b	不整形	4.36	0.47	-	N-45.8°-W
SN27	8	-	礎間溝	近世以降	I K	W24,X24,25	II b	不整形	0.72	0.61	-	N-47.4°-W
SN28	8	-	礎間溝	近世以降	I K	X24-25,Y25	II b	不整形	5.28	0.70	-	N-43.9°-W
SN29	8	-	礎間溝	近世以降	I K	X24-25,Y25	II b	不整形	2.45	0.85	-	N-44.2°-W
SN30	8	-	礎間溝	近世以降	I K	Y24	II b	不整形	0.67	0.43	-	N-49.3°-W
SN31	8	-	礎間溝	近世以降	I K	Z30	II b	不整形	1.23	1.13	-	N-37.1°-W
SN32	8	-	礎間溝	近世以降	I K	Y31,Z30-32,AA29-30,AB29	II b	不整形	14.19	1.39	-	N-54.0°-E
SN33	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AA28	II b	不整形	2.73	0.35	-	N-43.7°-W
SN34	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AA28	II b	不整形	3.71	0.41	-	N-43.8°-W
SN35	8	-	礎間溝	近世以降	I K	Z28-AA28,AA29-AB29,AC30	II b	不整形	12.40	1.41	-	N-46°-W
SN36	8	-	礎間溝	近世以降	1 K	AB30-31,AC30-32,AD31-32,AE31-32,AF31	II b	不整形	2.24	0.59	-	N-31.2°-W
SN37	8	-	礎間溝	近世以降	I K	Z27-28,AA27-28	II b	不整形	6.63	2.06	-	N-45.9°-E
SN38	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AB28-29	II b	不整形	2.52	0.49	-	N-46.4°-W
SN39	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AC28	II b	不整形	1.87	0.97	-	N-69.9°-W
SN40	8	-	礎間溝	近世以降	I K	Z31-32,AA31	III a	不整形	4.13	3.89	-	N-55.6°-E
SN41	8	-	礎間溝	近世以降	I K	Z28-AA29-30	II b	不整形	5.39	1.70	-	N-41.6°-W
SN42	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AA30,AB30	II b	不整形	3.08	1.72	-	N-38.7°-W
SN43	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AB30-34,AC32-34	II d	不整形	11.11	6.87	-	N-33.3°-W
SN44	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AA29	II b	不整形	1.67	0.58	-	N-54.3°-E
SN45	8	-	礎間溝	近世以降	I K	Y31-32	II b	不整形	2.13	0.90	-	N-29.0°-W
SN46	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AB30,AC30-31	III b	不整形	2.26	0.52	-	N-29.9°-W
SN47	8	-	礎間溝	近世以降	I K	AB31,AC31	III b	不整形	2.56	0.40	-	N-46°-W
SN48	8	-	礎間溝	近世以降	1 K	AB31,AC31,AD32,33	III b	不整形	11.18	0.29	-	N-39.6°-W
SP01	18	12	ピット	近世以降	I K	Z30	III a	円形	0.25	0.24	0.6	
SP02	18	12	ピット	近世以降	I K	Z28	III a	円形	0.26	0.22	0.3	
SP03	18	12	ピット	近世以降	I K	AB28	III a	円形	0.29	0.23	0.27	
SP04	18	13	ピット	近世以降	I K	AB29,AC29	III a	円形	0.44	0.35	0.22	
SP05	18	13	ピット	近世以降	I K	Y31	III a	円形	0.27	0.27	0.32	
SP06	18	13	ピット	近世以降	I K	AB29,AC29	III a	円形	0.25	0.21	0.2	
SP07	18	13	ピット	近世以降	I K	Z25	III a	不整形	0.76	0.53	0.18	
SP08	18	14	ピット	近世以降	I K	X25	III a	不整形	0.35	0.29	0.2	
SP09	18	14	ピット	近世以降	I K	X25	III a	楕円形	0.35	0.27	0.3	
SP10	18	14	ピット	近世以降	I K	X26	III a	円形	0.29	0.27	0.36	
SN04	17	8-10	機土跡	近世?	2 K	AF34	III a	不整形	1.13	1.07	0.1	

3はSD07出土の陶器徳利の胴部から肩部にかけての破片。輪轂成形で、外面には灰釉が施される。胎土はやや砂粒を含むが、精良で、灰白色を呈する。外面の上端部には成形時に施した横方向の沈線が、中央付近には焼成後に施した縦方向の釘書きが確認できる。瀬戸・美濃窯産で、18世紀後半から19世紀前半と考えられる。

4はSD07出土の陶器土鍋あるいは行平鍋の口縁部片。輪轂成形で、外面には透明釉が施される。胎土は精良で、白黄色を呈する。口縁部内側に蓋受けの突帯を有する。産地は不明だが、生産年代は19世紀以降と考えられる。

5はSD07出土の陶器甕の胴部片で、厚みは1.2mm程。胎土は精良で、褐灰色を呈する。外面は光沢のある黒褐色、内面は赤褐色を呈する。産地は不明だが、生産年代は19世紀以降と考えられる。

6はSD07出土の磁器の碍子。いわゆるノップ碍子と言われる碍子で、中心部に孔が開いており、ネジを通して造営材に取り付ける。

7は陶器碗の口縁部片。輪轂成形で、内外面に飴釉（黄褐色の鉄釉）とうのふ釉が施される。胎土は精良で、灰白色を呈する。瀬戸・美濃窯産の尾呂茶碗で、生産年代は17世紀後半から18世紀前半と考えられる。

8は陶器燈明皿片。燈明皿の上皿で、輪轂成形。内面から口縁部外面にかけて灰釉が施される。胎土は精良で、灰白色を呈する。京都・信楽窯産で、生産年代は19世紀前半から中頃と考えられる。

9は陶器壇徳利の底部片。輪轂成形で、外面には灰釉が施される。胎土は精良で、灰白色を呈する。京都・信楽窯産で、生産年代は19世紀前半から中頃と考えられる。

10は陶器土瓶の胴部片。輪轂成形で、外面には青緑色の釉が施される。胎土は精良で、灰白色を呈する。産地は不明だが、生産年代は19世紀前半から中頃と考えられる。 (内野)

11は2区I層中から出土した、陶器製のクリーム瓶である。昭和4年(1929)から昭和19年(1944)まで製造されていた株式会社レオン商会(現ロゼット株式会社)の「レオン洗顔クリーム」の瓶である。表と裏に窓状のエンボスがあり、当初はラベルが貼られていたものと思われる。白色釉を施した陶器製で、統制番号は確認されなかったが、戦時中の代用陶器と思われる。

12は1区攪乱中から出土した磁器製の湯呑である。胴部側面に、菊花文に「衆（血部に豕）」と、「衆（血部に豕）議院議員 宇田國榮」と描かれている。宇田國榮（国榮）は明治36年（1903）に生まれ、昭和63年（1988）に没した元衆議院議員である。昭和21年（1946）の第22回衆議院議員選挙で鹿児島1区から初当選し、農林政務次官や通信委員長などを歴任した。議員であったのは、昭和21年（1946）、昭和33年（1958）、昭和35年（1960）、昭和44年（1969）、昭和47年（1972）のため、上記のいずれかの時期に作られたものだと思われる。

b) ガラス製品 (第19図13~15、第9表)

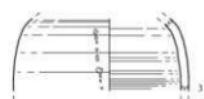
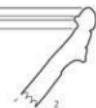
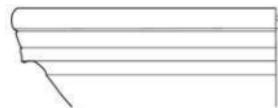
第19図13は2区I層耕作土中から出土したガラス製のインク瓶である。濃緑色のガラスで、気泡が多く含まれる。コルク栓口である。エンボスやラベルは無く、製造元は不明である。

14は1区攪乱から出土した、ガラス製の瓶である。大正9年（1920）に製造が開始された大下回春堂（現フマキラー株式会社）の「強力フマキラー」の瓶である。薄青緑色のガラス製で、胴部側面に「發賣本舗大下回春堂（右横書き）」と「專賣特許フマキラー（右横書き）」のエンボス印が見ら

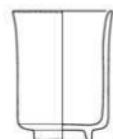
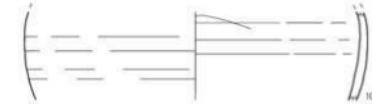
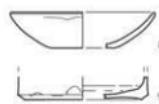
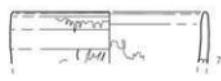
SD02



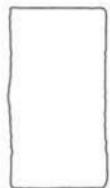
SD07



遺構外出土



0 2/3 5cm



0 1/3 10cm

第19図 近世・近代遺物 (1/3, 2/3)

れる。大下回春堂は昭和 25 年（1950）に株式会社に改組しており、それ以前に製造された瓶だとと思われる。

15 は 1 区表土から出土した、ガラス製の瓶である。日本麦酒鉱泉株式会社の「金線サイダー」の瓶である。薄青色のガラス瓶で、胴部側面に「KINSEN」「日本麦酒鉱泉株式会社（右横書き）」のエンボス印が見られる。金線サイダーは、明治 32 年（1899）から秋元巳之助によって横浜で製造されており、大正 4 年（1915）に金線飲料株式会社が設立される。その後、金線飲料株式会社は大正 14 年（1925）に日本麦酒鉱泉株式会社と合併し、金線サイダーは日本麦酒鉱泉株式会社から発売されていた「三ツ矢サイダー」と併売されるようになる。日本麦酒鉱泉株式会社が昭和 8 年（1933）に大日本麦酒株式会社に合併されると、金線サイダーは販売を終えるため、大正 14 年（1925）から昭和 8 年（1933）の間に製造された瓶だと思われる。

第 8 表 近世以降陶磁器観察表

辨別 回数	出土遺構 (層位・地点)	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	釉薬	備考	産地	時期
19-1 18-1	SD02 (X30)	陶器	徳利	-	-	*8.5	灰・ やや砂質	灰釉	輪轉成形	湘南・美濃	18C 後半-19C 前半
19-2 18-2	SD07 (Z26)	陶器	徳林	*32.0	-	-	赤褐色・ やや砂質	無釉	輪轉成形、櫛目 7 本単位	明	18C 代
19-3 18-3	SD07 (X29)	陶器	徳利	-	-	-	灰・ やや砂質	灰釉	輪轉成形、釘書き輪刻	湘南・美濃	18C 後半-19C 前半
19-4 18-4	SD07 (Y28)	陶器	土瓶	-	-	-	白質・ 精良	透明釉	輪轉成形		19C 以降
19-5 18-5	SD07 (AA26)	陶器	甕	-	-	-	赤褐色	灰釉			19C 以降
19-6 18-6	SD07 (AA26)	磁器	甕子	-	-	-	白・ 精良	透明釉	型版		近代
19-7 18-7	SN07 (AH33)	陶器	瓶	*11.8	-	-	灰・ 精良	白釉・甚美 波打・模様 波打・模様	輪轉成形、尾呂葉輪	湘南	17C 後半-18C 前半
19-8 18-8	遺構外 (1 層-A31)	陶器	灯明皿	*8.9	2.2	*3.9	灰白・ 精良	白釉・ 口縁部以下無釉	輪轉成形	京・信楽	19C 前半-中頃
19-9 18-9	遺構外 (1 層-231)	陶器	徳利	-	-	*7.2	灰白・ 精良	灰釉・ 底部以外無釉	輪轉成形	京・信楽	19C 前半-中頃
19-10 18-10	遺構外 (瓶足)	陶器	土瓶	-	-	-	灰白・ 精良	外壁・白釉 内面一部白釉	輪轉成形	-	19C 前半-中頃
19-11 18-11	遺構外 (1 層-AF33)	陶器	クリーム 瓶	4.9	6.3	3.7	黄白	白色釉	株式会社レオン商会「レオン 洗濯クリーナー」 戦中代用陶器	-	昭和 4 年（1929） -19 年（1944）
19-12 18-12	遺構外 (瓶足-Z28)	磁器	漏斗	6.8	8.1	3.7	白・ 精良	透明釉	色鉄、「藝文に樂」(質体?) 「東洋陶器製 田中國榮」	-	昭和 21 年（1946） -47 年（1972）

数値は現存値を記載。* は推定値を示す

第 9 表 近代ガラス製品観察表

辨別 回数	出土遺構 (層位・地点)	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	ガラス 色調	備考	製造会社	時期
19-13 18-13	遺構外 (1 層-AF34)	ガラス 製品	インク瓶	3.0	6.9	4.6	濃緑・ 気泡多	コルク栓口		近代
19-14 18-14	遺構外 (瓶足-Z28)	ガラス 製品	薬品瓶	2.6	23.4	5.6	薄青緑	エンボス印側面「發賣本舗 大下回春堂」「專賣 特許 マキラー」「300cc」底部「11」	大下回春堂	大正 9 年（1920） - 昭和 25 年（1950）
19-15 18-15	遺構外 (表土)	ガラス 製品	飲料瓶	2.6	22.9	5.2	薄緑	金線サイダー エンボス印側面「KINSEN」「日本麦酒鉱泉株 式会社」底部「2・5」	日本麦酒鉱泉 株式会社	大正 14 年（1925） - 昭和 8 年（1933）

数値は現存値を記載。* は推定値を示す

c) 煉瓦（第19図16、第10表）

第19図16は1区攢乱から出土した煉瓦である。深谷市上敷免に所在した日本煉瓦製造株式会社によって製造された煉瓦で、胴部に「上敷免製(右横書き)」の刻印が見られる。長手側が破損しており、寸法は長手194.6mm（現存）、小口110.6mm、厚さ61mmである。側面には機械押し出し成形による縮縫状の成形痕が見られる。日本煉瓦製造株式会社は明治22年（1889）に操業を開始し、製造された煉瓦は東京駅をはじめとする都内・関東の主要建築に用いられた。調査区内に建物基礎などは見られず、また煉瓦も数点程度しか出土しなかったことから、客土に含まれていたものだと思われる。日本煉瓦製造の煉瓦寸法は、大正14年（1925）にJES規格（長手210mm、小口100mm、厚さ60mm）が定められるまでは、標準的に長手227mm、小口109mm、厚さ61mmの寸法が用いられており、小口の寸法から16は大正14年以前かその前後に製造されたものと思われる。（高田）

第10表 近代煉瓦観察表

擲回 回数	出土遺構 (割位・地点)	種別	長手 (mm)	小口 (mm)	厚さ (mm)	胎土 色調	備考	製造者	時期
19-16	遺構外 (地表)	煉瓦	194.6	110.6	61	赤褐色	刻印制御「上敷免製」 機械押し出し成形による縮縫状の成形痕	日本煉瓦製造	明治中頃～大正末か
18-16									

数値は現存値を記載、「*」は推定値を示す

V 自然科学分析

1 小金井市 No.22 遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

小金井市に所在する小金井市 No.22 遺跡は、武藏野台地の中央部付近からやや南側へ寄った台地内に位置する。国土地理院発行の 1 万分の 1 地形図「小金井」などで遺跡の位置する付近の地形を確認すると、武藏野台地内に形成された仙川の流下する谷の最上流域に近い谷底にあることがわかる。谷の両岸の台地は、約 9 万年前に形成された M1a 面(遠藤ほか, 2019)に区分されているが、谷底にあたる本遺跡付近の離水年代は、それよりもかなり遅いことが推定される。

今回の発掘調査で作成された土層断面では、立川ローム層に相当すると考えられる褐色土層が認められたが、これまでの武藏野台地の立川ローム層とは異なり、層序区分の基準となる暗色帶が認められないために、台地上の標準層序との対比が困難とされている。本報告では、ローム層を対象として重鉱物組成と火山ガラスの産状を層位的に明らかにすることにより、標準層序との対比を試みる。また、本報告では近世の遺構覆土で認められた火山灰(テフラ)とされる堆積物の性状を明らかにし、テフラであれば既知のテフラとの対比を行う。

1. ローム層の層序対比

1. 試料

ローム層の試料は、調査区内で作成された 2 区ローム堆積状況確認トレンチ北壁より採取された(第 7 図)。土層断面はローム層の検出面を上面とし、深度およそ 2m ほどを基底として、上位より No.1 から No.12 までの試料番号が付された 12 点が 10cm ほどの間隔をあけて採取されている。ここでは、12 点全点を分析の対象とする。

2. 分析方法

(1) 重鉱物・火山ガラス比分析

試料約 40g に水を加え超音波洗浄装置により分散、250 メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径 1/16mm 以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径 1/4mm-1/8mm の砂分をポリタングステン酸ナトリウム(比重約 2.96 に調整)により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を 250 粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの

塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。また、火山ガラス比における「その他」とは、軽鉱物分における火山ガラス以外の粒子(石英や長石類などの鉱物粒子および風化変質粒など)である。

(2) 屈折率測定

上述した火山ガラス比分析処理後の砂分より火山ガラスを抽出し、その屈折率を測定する。屈折率の値は、テフラを特定するための指標となる。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

なお、今回の試料によっては、火山ガラス比分析で抽出した粒径1/4mm-1/8mmの砂分からは火山ガラスがほとんど含まれないものもあった。それらの試料については、処理過程で生じた1/8mm以下の砂分より火山ガラスを抽出して測定に供している。

3. 結果

(1) 重鉱物・火山ガラス比分析

結果を表1、図1に示す。重鉱物組成は、No.3とNo.7以外は、斜方輝石が多く、60～70%を占める。そのなかで、No.1、2、8、11、12の各試料は少量の單斜輝石と不透明鉱物を伴い、微量の角閃石を含む組成であり、No.4～6は他の試料に比べて單斜輝石の量比が高い特徴があり、No.9と10は少量の角閃石を含むという特徴が認められる。No.3とNo.7はカンラン石と斜方輝石が同量程度で主体を占め、少量の單斜輝石と不透明鉱物を作りうるという組成である。

火山ガラス比では、No.1に少量の中間型火山ガラスと微量のバブル型および軽石型火山ガラスが含まれるほかは、いずれの試料もバブル型火山ガラスなどが微量含まれるのみである。

(2) 屈折率測定

結果を図2、3に示す。今回の試料では、No.9～12において火山ガラスが極めて微量しか抽出できず、特にNo.9とNo.12では抽出することができなかった。そのため、No.9とNo.12については、分析処理の過程で生じた1/8-1/16mmの径の砂分を用いて火山ガラスの屈折率を測定した。

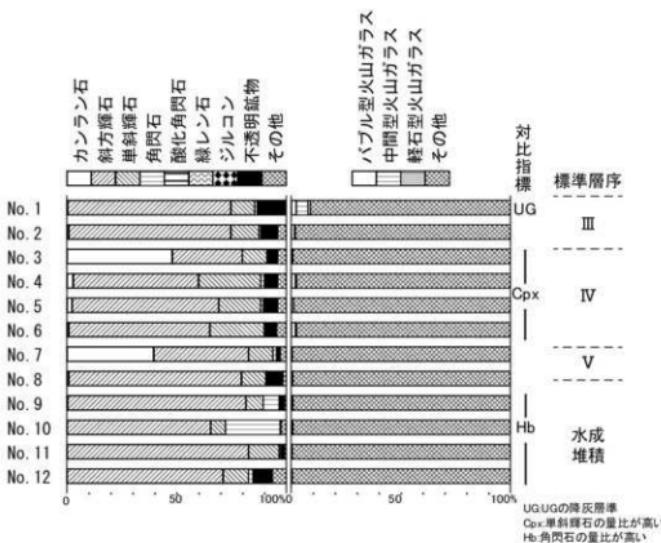
各試料の屈折率は、No.1～3とNo.4～8で若干の傾向の違いが認められる。前者のグループは値のレンジの下限がn1.497または1.498であり、上限はn1.502～1.504、モードはn1.501または1.502付近にある。後者のグループは、レンジの下限は前者のグループとほぼ同様であるが、レンジの上限はn1.501～1.503とやや低く、モードもn1.498～1.500と前者のグループに比べてやや低い傾向がうかがえる。No.9～No.12については、傾向としては後者のグループに入るとみることができる。

4. 考察

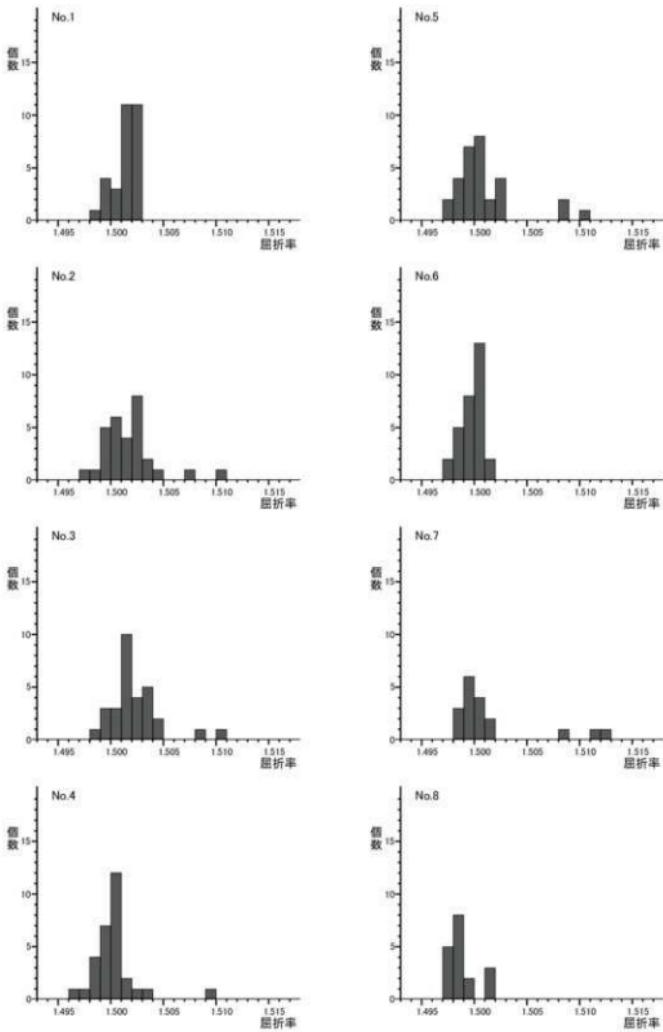
武藏野台地の立川ローム層については、暗色帶を基準とした分層が古くより行われており、標準層序ともいるべき共通した層名が用いられている。矢作・橋本(2012)は、武藏野台地各地における立川ローム層の重鉱物組成の層位的な変化を調べ、重鉱物組成の主体となっているのはカンラン石と斜方輝石であり、副次的な要素として單斜輝石があり、これらの鉱物の量比の極大層準(層位方向にみた量比の増減の山となる層準のこと)が対比指標となることを見出した。

第11表 ローム堆積状況確認トレンチ北壁土壌サンプル(No.1)の重鉱物・火山ガラス比分析結果

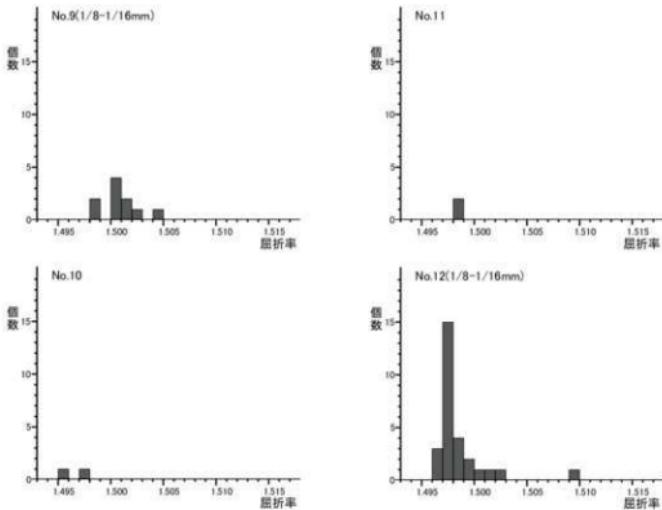
試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
No.1	1	186	27	3	0	0	0	33	0	250	6	13	3	228	250
No.2	2	185	32	2	0	0	0	19	10	250	4	1	0	245	250
No.3	120	80	28	1	0	0	0	11	10	250	1	0	1	248	250
No.4	7	143	71	4	0	0	0	15	10	250	5	1	0	244	250
No.5	6	167	48	3	0	0	0	16	10	250	3	0	0	247	250
No.6	2	161	62	0	0	0	0	14	11	250	5	0	1	244	250
No.7	99	108	28	4	0	0	0	4	7	250	1	0	0	249	250
No.8	2	197	28	1	0	0	0	18	4	250	2	0	0	248	250
No.9	1	203	20	18	0	0	0	6	2	250	1	1	0	248	250
No.10	0	164	17	62	0	0	0	1	6	250	1	1	0	248	250
No.11	0	207	35	2	0	0	0	4	2	250	1	0	0	249	250
No.12	0	178	29	5	0	0	0	22	16	250	1	0	0	249	250



第20図 ローム堆積状況確認トレンチ北壁土壌サンプル(No.1)の重鉱物組成および火山ガラス比



第21図 火山ガラスの屈折率（1）



第22図 火山ガラスの屈折率（2）

今回の立川ローム層とされた試料の重鉱物組成は、カンラン石と斜方輝石が主体となる組成を示しているのは No.3 と No.7 のみであり、他の試料にはカンラン石が微量かほとんど含まれず、また、No.9 や No.10 には立川ローム層中にはほとんど含まれることのない角閃石が少量含まれているなど、一般の武藏野台地の立川ロームの重鉱物組成とは大きく異なっている。このことは、今回対象とされた土層が、風成塵を母材として乾陸上で形成された累積性の土壤というローム層の形成環境とは異なる環境下で形成された土壤であることを示唆している。調査区が谷内に位置することを考慮すれば、土層の形成には流水や地下水などの水が関わっている可能性が高い。

土層下部の No.9 や No.10 に含まれる角閃石は、立川ローム層の母材となっている乾陸上に累積する風成塵の中にはほとんど含まれないことから、その由来は水流により運ばれてきた碎屑物に求められる。したがって、No.9 や No.10 の形成は、水成下で進行した可能性があると考えられる。その上位の層位で、カンラン石が微量にしか含まれないことについては、カンラン石が水の影響により溶失してしまった可能性がある。カンラン石の溶失については、町田ほか (1983) により、水の影響によりローム層中のカンラン石が溶失する例が示されている。No.7 ではカンラン石が多く含まれることから、この層位ではすでに乾陸上でのローム層形成が進行していたと考えられるから、No.6 ~ No.4においてカンラン石が微量しか含まれない理由としては、おそらく地下水等による長期的な水の影響がその層準に後天的に加わった可能性がある。No.2 と No.1 におけるカンラン石の微量しか含まれない理由も同様であろう。その場合、No.6 ~ No.4 も No.2 ~ No.1 も基本的には風成塵の累積による形成であるから、その重鉱物組成は、台地上のローム層の同層位のローム層からカンラン石のみを除

いた組成に近いと考えられる。

ここで、本地点においては、立川ローム層の標準層序のVI層に認められるバブル型火山ガラスの濃集層準が認められなかった理由について考えてみたい。立川ローム層中に認められるバブル型火山ガラスの濃集は、これまでの分析事例で認められた産出層位と形態および屈折率の値などにより、鹿児島湾奥部の始良カルデラを給源とする始良 Tn テフラ (AT: 町田・新井, 1976) の降灰に由来することがわかっている。AT の噴出年代については、水月湖の年縞堆積物の研究により、曆年で 3.0 万年前であることが確定している (Smith et al., 2013)。

今回の分析結果では、各試料からバブル型火山ガラスが検出され、No.4 以下の試料の火山ガラスの屈折率に AT の屈折率の傾向を認めることができる。しかし、バブル型火山ガラスの濃集層準は検出されなかつたのは、AT の降灰が流水下で形成された No.9 以前の形成時期であったことによると考えられる。降灰した AT の火山ガラスは細粒のために、流水下では堆積層を構成するほど残存しなかつたと考えられる。また、乾陸となった No.7 以上の形成時期に AT の降灰があったとすれば、台地上のローム層と同様に濃集層準が形成されるはずであり、それが認められないということも No.9 以前に降灰したことに対する支持をしている。

上述したように、AT の火山ガラスの濃集は標準層序のVI層にあるから、本地点の No.7 はそれより上位の標準層序V層付近に対比される可能性がある。また、No.6 ~ No.4 では単斜輝石の量比が比較的高いことが指摘できるが、この組成は武藏野台地の立川ローム層の標準層序のIV層に特徴的に認められる組成でもある。したがって、No.6 ~ No.4 は標準層序のIV層付近に対比されると考えられる。さらにローム層最上部の No.1 には、微量のバブル型のほかに少量の中間型と微量の軽石型も含まれ、屈折率の値も No.4 以下に比べて若干高いモードを示している。これら中間型と軽石型の火山ガラスは、その形態と屈折率およびローム層最上部という検出層位から、立川ローム層上部ガラス質テフラ (UG: 山崎, 1978) に由来すると考えられる。UG の噴出年代については、UG の由来と考えられている浅間火山の軽石流期のテフラの年代が層位学的な年代も加味した曆年で 1.5 ~ 1.6 万年前とされている (町田・新井, 2003)。武藏野台地の立川ローム層における UG の降灰層準は、多くの場合標準層序のⅢ層上部に推定されるから、本地点の No.3 ~ No.1 は標準層序のⅢ層付近に対比されると考えられる。

II . 溝状遺構覆土中のテフラ分析

1. 試料

試料は、近世の耕作に係ると考えられている溝状遺構の SD04 の覆土から採取された堆積物 1 点である。発掘調査所見では、宝永 4 年 (AD1707 年) に江戸に降灰した富士宝永スコリア (F-Ho) の降下堆積物と考えられている。

試料名は火山灰サンプル (No.6) であり、外観は黒褐色を呈するシルト混じりの砂である。

2. 分析方法

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有

量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

3. 結果

処理後の砂分は多量のスコリアにより構成される。スコリアは、最大径 1.2mm であるが径 0.5mm 以下のものを主体とし、粒径の淘汰度は非常に良好である。黒色で発泡不良のスコリアが多く、他に褐色で発泡やや不良のスコリアや黒色で発泡やや不良、赤色で発泡不良のスコリアなどが混在する。

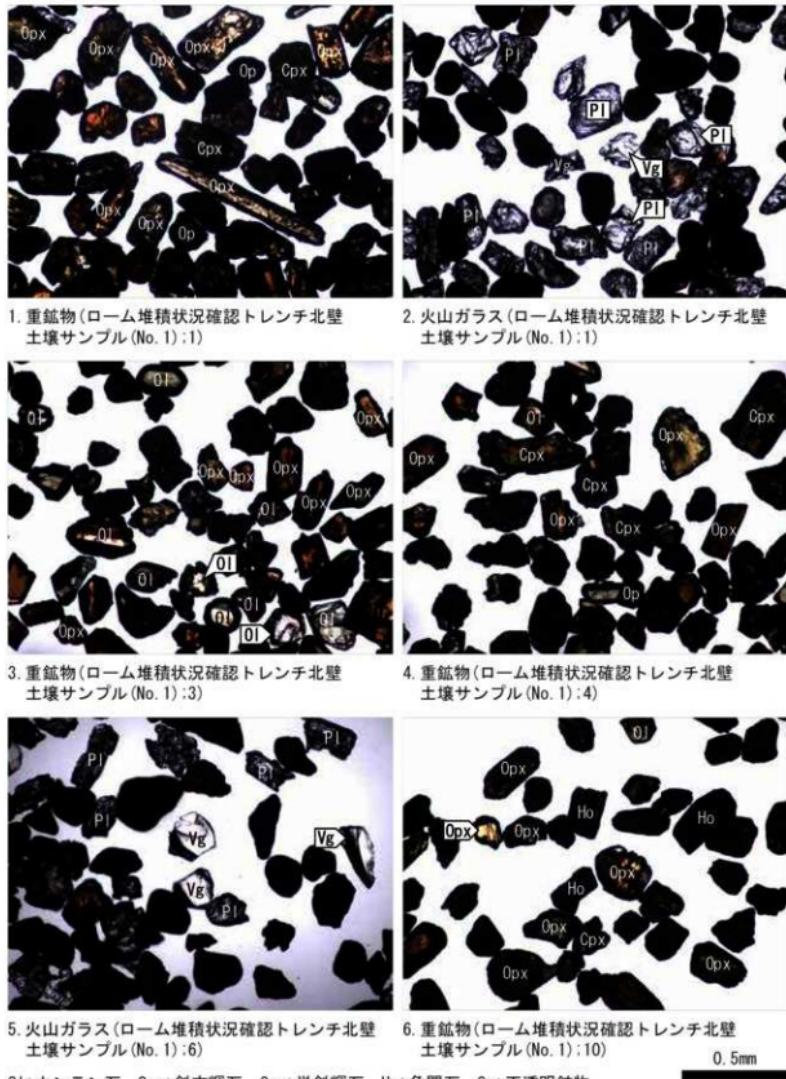
4. 考察

テフラ分析を行った試料は、多量のスコリアからなることと、堆積状況から、遭構埋積時に降下堆積したスコリア質テフラであると考えられる。発掘調査所見による遭構の構築年代は近世であることと、遭跡の地理的位置を考慮すれば、スコリアは、完新世に富士山から噴出した新期富士テフラに由来する。新期富士テフラの層序については、上杉 (1990) や宮地 (2011) に詳しいが、これらの記載に従えば、近世以降の新期富士テフラは、1707 年 (宝永 4 年) に噴出した宝永スコリア (F-Ho) にほぼ限定される。これまでにも、東京都内の低地遺跡では、F-Ho の降下堆積層が各所で確認されているが、それらのスコリアの特徴も今回の試料のそれとほぼ同様である。

以上のことから、SD04 の覆土から採取されたテフラと考えられる堆積物は、F-Ho の降下堆積物が、遭構覆土中に残存したものと考えられる。したがって、SD04 の構築年代は新しくとも 1707 年以前であると推定される。

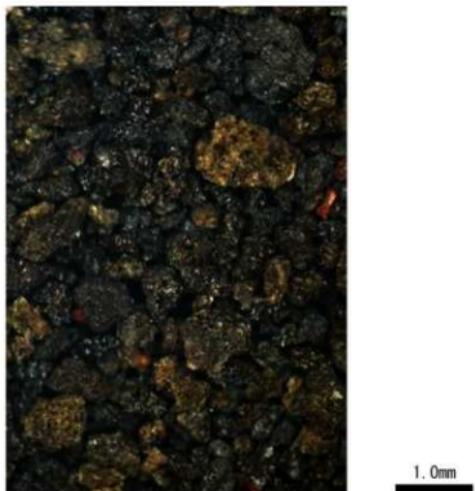
引用文献

- 遠藤邦彦・千葉達朗・杉中佑輔・須貝俊彦・鈴木毅彦・上杉 陽・石綿しげ子・中山俊雄・舟津太郎・大里重人・鈴木正章・野口真利江・佐藤明夫・近藤玲介・堀 伸三郎,2019,武藏野台地の新たな地形区分,第四紀研究,58,353-375.
- 古澤 明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別,地質学雑誌,101,123-133.
- 町田 洋・新井房夫,1976,広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—,科学,46,339-347.
- 町田 洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス,東京大学出版会,336p.
- 町田瑞男・村上雅博・斎藤幸治,1983,南関東の火山灰層中の変質鉱物“イディングサイト”について,第四紀研究,22,69-76.
- 宮地直道,2011,過去 1 万 1000 年間の富士火山の噴火史と噴出率,噴火規模の推移,荒牧重雄・藤井敏嗣・中田節也・宮地直道編 富士火山,日本火山学会,79-95.
- 上杉 陽,1990,富士火山東方地域のテフラ標準柱状図—その 1:S-25 ~ Y-114 —,関東の四



Ol: カンラン石, Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Ho: 角閃石, Op: 不透明鉱物,
Vg: 火山ガラス, Pl: 斜長石.

第 23 図 重鉱物・火山ガラス



1. F-Hoのスコリア (SD04火山灰サンプル(No. 6))

第24図 テフラ分析資料

紀.16.3-28.

Smith, V.C., Staff, R.A., Blockley, S.P.E., Ramsey, C.B., Nakagawa, T., Mark, D.F., Takemura, K., Danhara, T., Suigetsu 2006 Project Members. 2013. Identification and correlation of visible tephra in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive. Japan: chronostratigraphic markers for synchronizing of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. Quaternary Science Reviews, 67, 121-137.

矢作健二・橋本真紀夫, 2012, 重鉱物組成と火山ガラス比による武藏野台地の立川ローム層層序対比. 新西郊文化, 2,7-18.

山崎晴雄, 1978. 立川断層とその第四紀後期の運動. 第四紀研究, 16, 231-246.

2 小金井市 No.22 遺跡出土縄文土器の圧痕調査について

守屋 亮

1. はじめに

小金井市 No.22 遺跡は、仙川上流域にあたる小金井市本町に所在する。近年、東京都内における縄文土器の種実圧痕調査事例が増加しているが（大綱ほか 2021 等）、仙川上流域においては発掘調査事例が少ないため、土器圧痕調査の事例も少ない。そこで今回、本遺跡の包含層から出土した縄文土器片を対象として、試験的に表出圧痕調査を実施した。

2. 対象資料と分析方法

対象資料は、縄文土器片計 96 点（計 1,445.5g）である。内訳は、縄文時代前期の諸磯 c 式が 89 点（計 1,293.4g）、縄文時代中期後半の加曾利 E 式が 7 点（計 152.1g）である。これらの資料の表出圧痕を対象とした。

分析方法には、レプリカ法（丑野・田川 1991）を用いた。印象材にはシリコーン樹脂 JM シリコンインジェクションタイプ（株式会社モリタ）を使用した。作成したレプリカ試料の観察・撮像には走査型電子顕微鏡（JEOL JSM-T500、東京都埋蔵文化財センター所蔵）を使用し、操作は守屋が行った。

3. 結果

分析の結果、縄文時代前期の諸磯 c 式土器 1 点（第 13 図 3）から、不明果皮または種皮 1 点と不明種実 1 点の計 2 分類群が確認された（第 12 表）。以下、同定の根拠を記載する。

不明果皮または種皮（第 25 図、13_22KH_006_01）

厚さ 0.83mm である。堅果類の果皮等の可能性がある。

不明種実（第 25 図、13_22KH_006_03）

形状は広楕円形で、側面は扁平である。長さ 2.17mm、幅 1.95mm で、網目状の組織が確認される。

4.まとめ

今回の対象は小片 89 点であるため資料数としては少いものの、不明種実等の圧痕が確認された。今後の仙川上流域の調査事例増加による研究の進展が期待される。

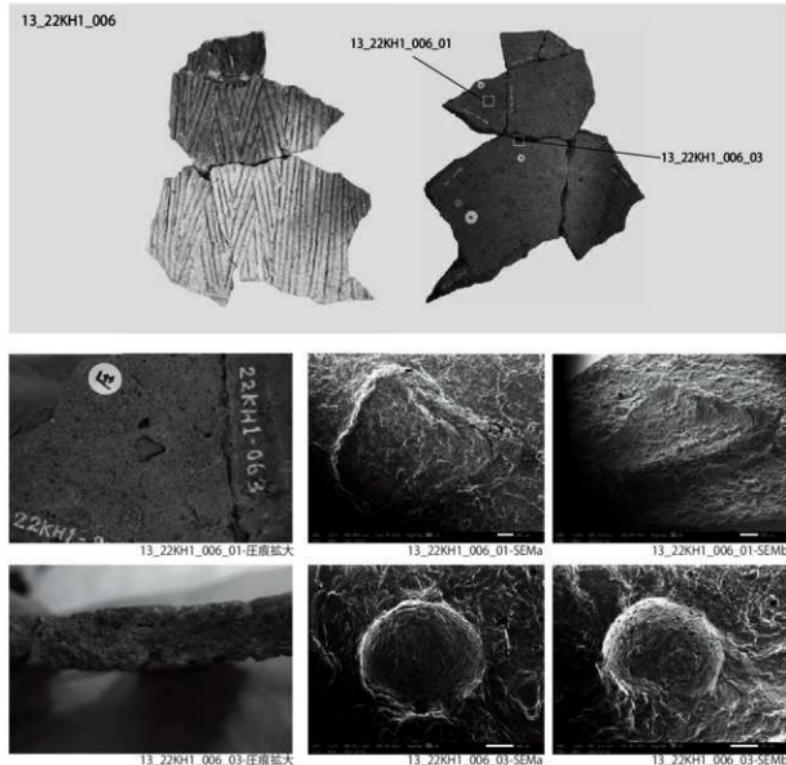
参考文献

- 大綱信良・守屋 亮・佐々木由香・長佐古真也 2021「土器圧痕からみた縄文時代中期における多摩ニュータウン遺跡群の植物利用と遺跡間関係（第 2 報）」『研究論集』35、東京都埋蔵文化財センター、1-29
丑野 裕・田川裕美 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24、日本文化財科学会、13-36

第 12 表 種実圧痕一覧

土器番号	図番号	試料番号	時期	土器型式	器種	圧痕 残存部位	圧痕 残存面	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	分類群	部位
22KH1-5N004-1	第 13 図 3	13_22KH1_006_01	縄文前期	諸磢 c	深鉢	脇部	内面	-	-	0.83	不明	果皮または種皮
22KH1-063-1	第 13 図 3	13_22KH1_006_03	縄文前期	諸磢 c	深鉢	脇部	断面	2.17	1.95	-	不明	種実

＊測定名、土壤番号、試料番号



第 25 図 種実圧痕写真

VI 調査の成果と課題

1 繩文時代

今回の調査では、住居跡の検出は無かったものの、縄文時代の遺構として土坑2基（SK01・02）が確認された。非常に緩やかな傾斜だが、標高の低い谷底へ軸を向けており（第11図）。谷が埋積を始めてからも地下水などの影響を長期的に受けており、雨水が溜まりやすい土壌であることからも（第V章1参照）、谷の底部に溜まつた雨水などに集まる動物を対象とした陥し穴と推測される。これらの土坑は調査区南端の壁際で検出されたため、調査区外で他にも確認される可能性がある。

また、今回の調査では縄文時代の遺物は全てⅢa層中から出土した。Ⅲ層は上下層と比べて黒褐色化が進まず、にぶい黄褐色を呈していた。Ⅲa層からは縄文土器、石礫、被熱礫が出土し、遺物の出土標高は概ね65.0mである。石礫、被熱礫の帰属時期は不明だが、土器は前期後葉の諸磯c式（第13図1-9）と中期後葉の加曾利E式（第13図12,13）が同地点から出土している。諸磯c式よりも下位に加曾利E式が出土するなど、遺物の上下関係が土器型式の時期差と一致しないことは、Ⅲa層が再堆積層である可能性を支持するものである。Ⅲa層中（谷底部）から出土した土器・石器・被熱礫は谷上から流れ込んだ可能性を考えられるが、今回の調査所見のみでは確証は得られない。しかし、縄文時代の仙川流域は水利の面で長期的な居住に向かない地域とされてきたが、今回の調査で遺物が検出されたことから、前述のような水の得やすい季節にのみ、短期的に滞在していた可能性はあるだろう。よって、谷上の平坦部や縁辺部では、今後より多くの痕跡の発見が期待される。

2 近世以降

近世の遺構として、宝永4年（1707）の富士山噴火による火山灰を含む4条の溝状遺構（SD03～06）が検出された。溝は平行しており、等間隔に検出されたことから畝間溝と推測される。また、詳細な時期は不明だが、近世の所産であると思われる、村境の境堀と思われる溝状遺構（SD01）や道跡の可能性がある溝状遺構（SD02）も検出された。

野川流域では、中世末期から近世初期にかけて貫井村と小金井村が形成され、天和3年（1683）頃に小金井村は上小金井村と下小金井村の二村に分村される。明治8年（1875）の「貫井村全國坂上」（附図2）によれば、調査地点は貫井村と下小金井村の境界にあたり、境堀と思われるSD01より西が貫井村、東が下小金井村にあたる。調査地点周辺は、下小金井村のうち上山谷にあたり、さらに仙川の低地帯は長久保（現小金井本町住宅南東隅周辺）と呼ばれていた。

市内北部は承応2年（1653）に玉川上水が開削されてから新田開発が始まり、調査地点周辺である下小金井村が使用したのは玉川上水の分水である下小金井村分水である。下小金井村分水の開通年代は不明だが、元禄9年（1696）、長久保に仙川と分水が交差する築樋（「山王窟の築樋」）が築かれたとの記録が残っている（『小金井市史通史編』）ことから、分水についてもその前後に開通したものと推測される。明治2年（1869）の「小金井村全図」（附図1）によると、下小金井村分水は調査地点の東を南東方向に流れている。SD03～06も同様に北西-南東に軸を持つことは、分水に応じた区

画で耕作地が作られたことに由来すると推測される。これらのことから、SD03～06 が作られたのは元禄9年（1696）から宝永4年（1707）の間で、調査地点周辺は分水の設置以降に耕作地として使用され始めたと思われる。SD01・02については、詳細な時期は不明だが、下小金井村分水および SD03～06 と直行するように北東-南西軸を持つことから、こちらも分水が設置以降に作られたものだと思われる。

目視で火山灰が確認できた SD03～06 と異なり、SD01・02 には火山灰は堆積していなかったことから、SD01・02 は SD03～06 よりも新しく、宝永4年（1707）以降に作られた溝であると思われる。SD01 の覆土は、壁面の崩落土によって構成される覆土下部と、耕作土で構成される覆土上部に分けられ、耕作地として使用されていたいずれかの時期に埋め戻されたものと思われる。

前述の「小金井村絵図」、「貫井村全図 坂上」には、小金井村と貫井村の境界道として「小金井境界通」の記載がある。境界道の帰属時期は不明だが、調査地点周辺が 18世紀初頭には耕作地として使用されていたことから、境界道についても近代以前から使用されていた可能性がある。

この境界道については、明治13年（1880）の「迅速測図 神奈川縣北多摩郡小金井村及貫井村」（附図3）や昭和12年（1937）の「小金井町全図」（附図4）にも、ほぼ位置が変わらずに記載されている。この境界道は大正9年（1920）に村道第19号線として路線番号が当たられ、昭和12年（1937）に町制となってからも町道第19号線として継承される。昭和15年（1940）・17（1942）年に行われた強制買収により、調査地点周辺は陸軍技術研究所の用地に含まれ、南北に走る研究所内道（現ナンジャモンジャ通り）によって、町道19号は分断される。調査地点に含まれる箇所は、市道第344号線として残されており、終戦間際の航空写真などでも見ることができる（附図5）。昭和36年（1961）年の本町住宅造成時まで存在していた。境堀（SD01）の廃絶時期は不明だが、関連する道は近世から昭和中期まで存在しており、境堀についても比較的の長期間にわたって利用されていた可能性がある。

（高田）

参考文献

- 小金井市史編さん委員会 1970『小金井市誌II 歴史編』小金井市役所
- 小金井市史編さん委員会 2019『小金井市史：資料編 考古・中世』小金井市
- 小金井市史編さん委員会 2019『小金井市史：通史編』小金井市
- 貝塚爽平 1979『東京の自然史』紀伊國屋書店
- 遠藤邦彦他 2019『武藏野台地の新たな地形区分』『第四紀研究』58卷6号, 353-375
- 久保純子 1988『相模野台地・武藏野台地を刻む谷の地形：風成テフラを供給された名残川の谷地形』『地理学評論』61
- 小林謙一・中山真治・黒尾和久 2004『多摩丘陵・武藏野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（補）』『シンポジウム 縄文集落研究の新地平3 一勝坂から曾利へ—発表要旨』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会
- 上條朝宏 2012『多摩ニュータウン区域と都区内の新期テフラ及び相模原と武藏野台地の立川ローム最下層について』『東京都埋蔵文化財センター研究論集26』東京都埋蔵文化財センター
- 町田 洋 1964『Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史』『地学雑誌』73-5. 公益社団法人 東京地学協会
- 関根慎二 2008『諸磯式土器』『総覧 縄文土器』小林達雄編 株式会社アム・プロモーション
- 細田 勝 2008『加曾利E式土器』『総覧 縄文土器』小林達雄編 株式会社アム・プロモーション
- 松崎元樹 2010『東京都・埼玉県における横穴墓の特性』『横穴墓と古墳』東北・関東前方後円墳研究会
- 湯瀬禎彦 2015『武藏国府における古代東海道の検証』『東京考古』33. 東京考古談話会
- 小金井市文化財センター 2022『小金井の湧水点 part2』『小金井市文化財センター通信 No.2』
- 濱田徳太郎 1936『第日本麦酒株式会社三十年史』大日本麦酒株式会社
- 森田忠吉 1910『横浜成功名譽鑑：開港五十年記念』横浜商況新報社
- 桜井準也 2019『増補 ガラス瓶の考古学』六一書房
- 秋山久美子 2005『清涼飲料水（ラムネ・サイダー）の近代史』『学苑』778.29-42 昭和女子大学
- 日外アソシエーツ株式会社編 2003『新訂 政治家人名事典 明治～昭和』日外アソシエーツ
- 商工省工業品規格統一調査会編 1940『日本標準規格：JES』第1輯, 工業調査協会
- 石田真弥・関崇夫 2019『煉瓦寸法の変遷と組積技術の関連性に関する研究：群馬県内の煉瓦造建造物を大正として』『前橋工科大学研究紀要』22.13-21 前橋工科大学
- 一般財団法人日本地図センター「神奈川県武藏國北多摩郡小金井村及貫井村」『明治前期測量 2万分の1 フランス式彩色地図—第一軍管地方二万分一迅速測圖原圖覆刻版一』

写 真 図 版

図版 1



1. 1 区 調査着手前（南東から）



2. 2 区 調査着手前（南西から）

図版 2



1. 2 区 調査区東壁（南西から）



2. 2 区 調査区東壁（北西から）

図版 3



1. 2 区 調査区北壁（南から）



2. 2 区 調査区北壁 ローム堆積状況（南から）



1. SK01・SK02 完掘状況 全景（北西から）



2. SK01 完掘状況（南西から）



3. SK01 セクション（北西から）



4. SK01 下部施設 セクション（南西から）



5. SK01 下部施設 セクション（南西から）

図版 5



1. SK01 下部施設 完掘状況（南西から）



2. SK02 完掘状況（北西から）



3. SK02 セクション（北西から）



4. SK02 下部施設 セクション（北東から）



5. SK02 下部施設 セクション（北東から）



6. SK02 下部施設 完掘状況（北東から）

図版 6



1. 1区 繩文土器出土状況（南から）



2. 1区 繩文土器出土状況（南西から）

図版 7



1. SS01 遺物出土状況（東から）



2. SS01 遺物出土状況（北から）

図版 8



1. SD03～06・SX01 検出状況（南から）



2. SD03～06・SX01 完掘状況（南から）

図版 9



1. SD03 完掘状況（南東から）



2. SD03 セクション（南東から）



3. SD04 完掘状況（南東から）



4. SD04 セクション SPA-A'（南東から）



5. SD04 セクション SPB-B'（南東から）



6. SD05 完掘状況（南東から）



7. SD05 セクション（南東から）

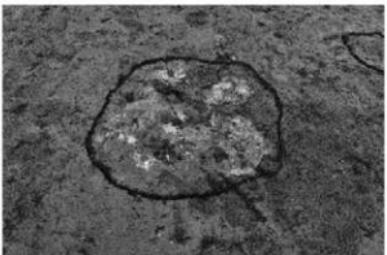


8. SD06 完掘状況（南東から）

図版 10



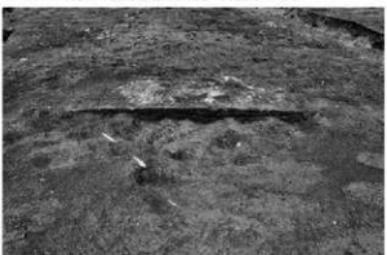
1. SD06 セクション（南東から）



2. SX01 焼土範囲 検出状況（北西から）



3. SX01 焼土跡 完掘状況（南東から）



4. SX01 焼土跡 セクション（北西から）



5. 1区 近世以降遺構検出状況 全景（南から）

図版 11



1. SD01・02 セクション SPA-A' (南西から)



2. SD01 セクション SPA-A' (南西から)



3. SD02 セクション SPA-A' (南西から)

4. SD01・02 セクション SPB-B' (南西から)



5. SD01 セクション SPB-B' (南西から)



6. SD02 セクション SPB-B' (南西から)



7. SD01 セクション SPA-C' (南西から)

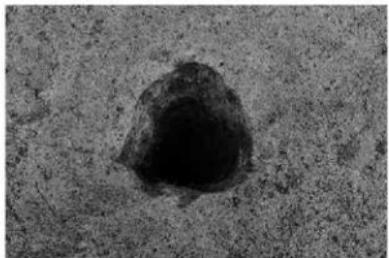


8. SD07 セクション SPA-A' (南西から)

図版 12



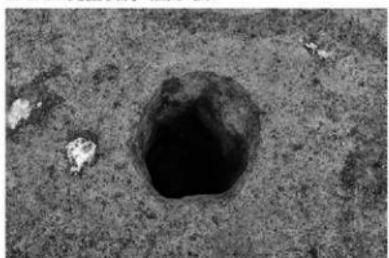
1. SD07 セクション SPB-B' (南西から)



2. SP01 完掘状況 (西から)



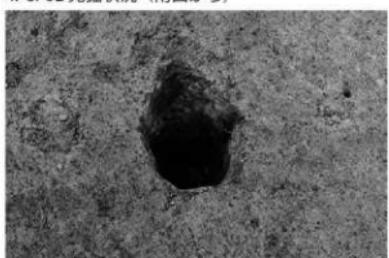
3. SP01 セクション (西から)



4. SP02 完掘状況 (南西から)



5. SP02 セクション (南西から)

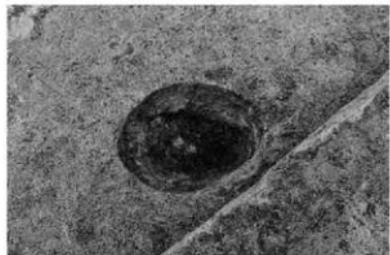


6. SP03 完掘状況 (東から)



7. SP03 セクション (東から)

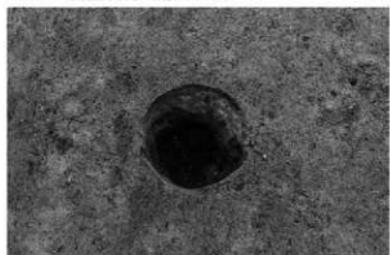
図版 13



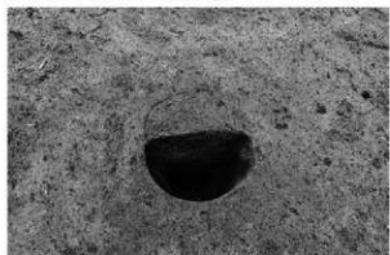
1. SP04 完掘状況（南西から）



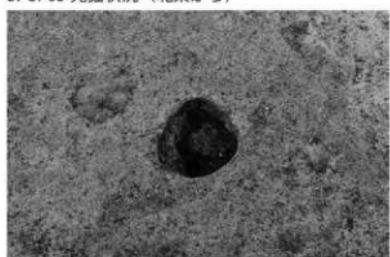
2. SP04 セクション（東から）



3. SP05 完掘状況（北東から）



4. SP05 セクション（北東から）



5. SP06 完掘状況（南から）



6. SP06 セクション（南から）

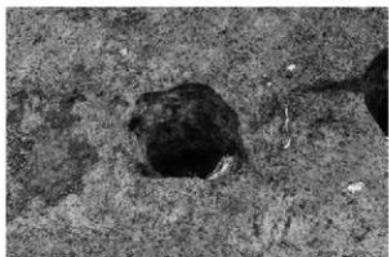


7. SP07 完掘状況（東から）

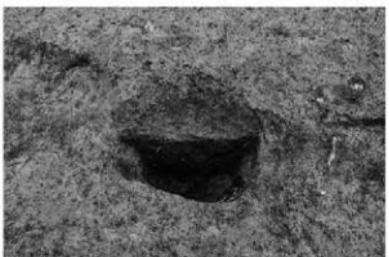


8. SP07 セクション（東から）

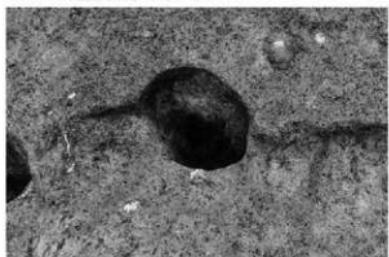
図版 14



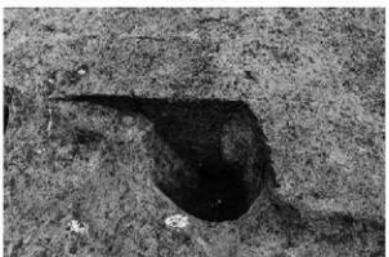
1. SP08 完掘状況（北から）



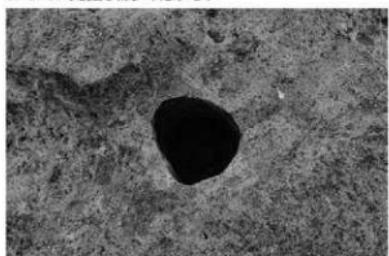
2. SP08 セクション（北から）



3. SP09 完掘状況（北から）



4. SP09 セクション（北から）



5. SP10 完掘状況（北東から）



6. SP10 セクション（北東から）



1. 1区 完掘状況 全景（南から）



2. 2区 完掘状況 全景（南から）

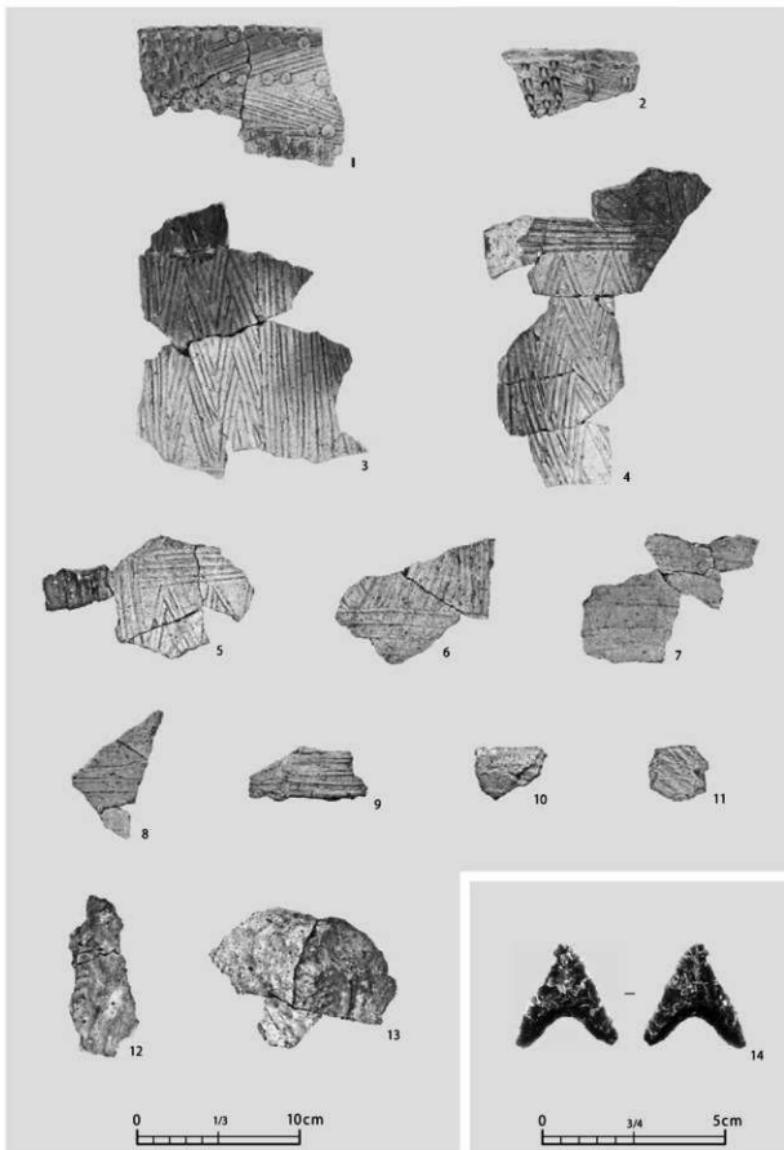


1. 1 区 調査終了後（南西から）



2. 2 区 調査終了後（西から）

図版 17



1. 繩文時代 遺物写真図版

図版 18



1. 近世～近代 遺物写真図版

附 図

附図 1

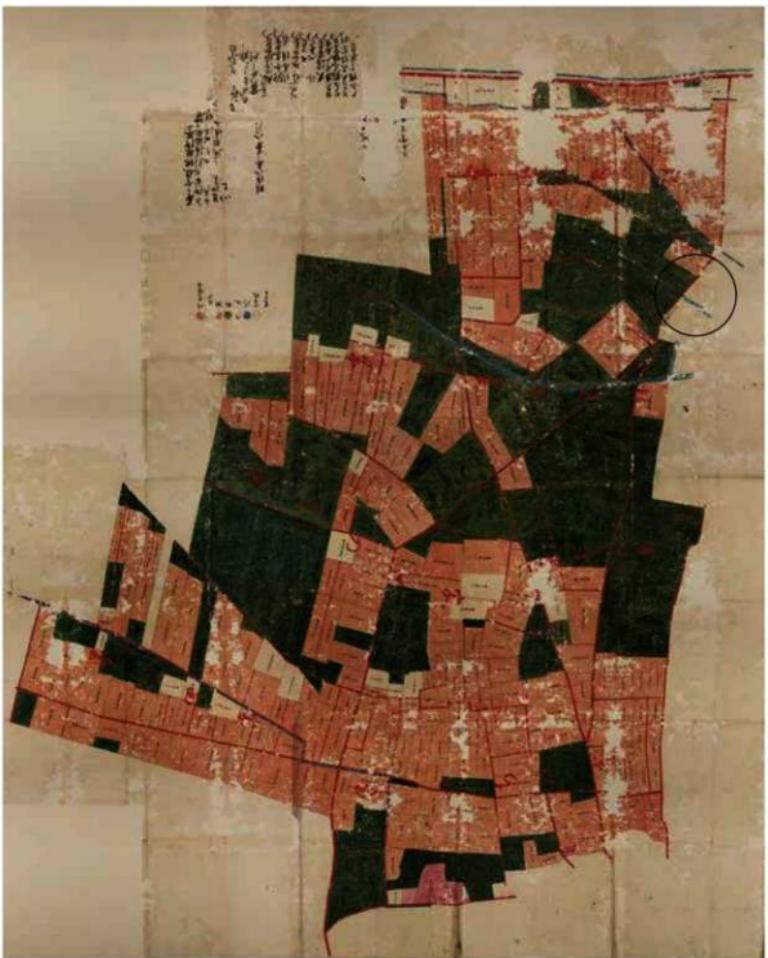


○は調査地点周辺を示す

「小金井村絵図」 明治 2 年 (1869)

小金井市教育委員会所蔵

附図 2

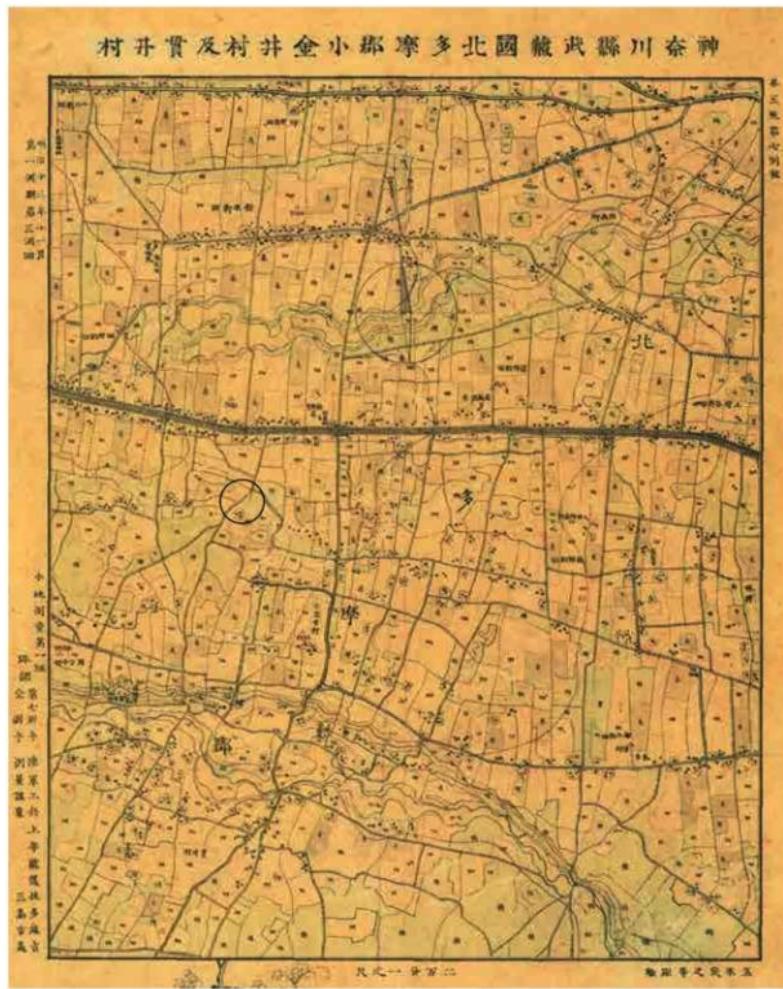


○は調査地点周辺を示す

「貫井村全図 坂上」 明治 8 年 (1875)

小金井市教育委員会所蔵

附図3

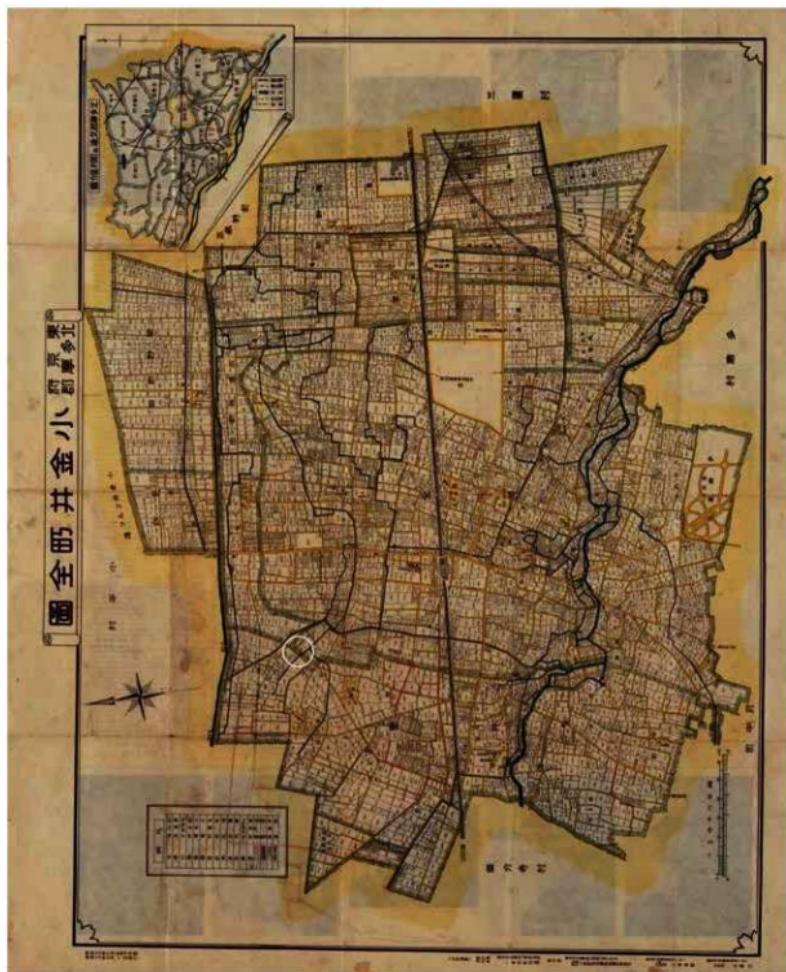


○は調査地点周辺を示す

明治13年（1880）「神奈川縣武藏國北多摩郡小金井村及貫井村」

出典：「明治前期測量2万分の1 フランス式彩色地図—第一軍管地方二万分之一迅速測圖原圖覆刻版一」（一財）日本地図センター
国土地理院所蔵

附図4



○は調査地点周辺を示す

「小金井町全図」 昭和 12 年（1937）

小金井市教育委員会所蔵

附図 5



○は調査地点周辺を示す

陸軍航空写真 昭和 16 年（1941）6 月 25 日撮影

国土地理院所蔵 空中写真閲覧サービス（整理番号 C23 コース番号 C7 写真番号 160）



○は調査地点周辺を示す

米軍航空写真 昭和 22 年（1947）11 月 14 日撮影

国土地理院所蔵 空中写真閲覧サービス（整理番号 USA コース番号 R556-No1 写真番号 6）

報告書抄録

ふりがな	こがねいしなんばー 22 いせき						
書名	小金井市 No.22 遺跡						
副書名	小金井本町住宅建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査						
シリーズ名	東京都埋蔵文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第378集						
編著者名	高田優衣 内野正 守屋亮 竹花宏之 バリノ・サーヴェイ株式会社						
編集機関	公益財団法人東京都教育支援機構 東京都埋蔵文化財センター						
所在地	〒 206-0033 東京都多摩市落合一丁目 14 番 2 TEL 042-374-8044						
発行年月日	西暦 2023 年 9 月 29 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
なんばー 22 いせき No.22 遺跡	とうきょうどこがねいしあんばー 22 いせき 東京都小金井市本町 よんちょうめ ななばんちない 四丁目 7 番地内	132101	022	35°42'31"	139°30'05" 20220601 ~ 20221130	995 m ²	小金井本 町住宅建 替事業に 伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
小金井市 No.22 遺跡	包蔵地	縄文 近世以降	土坑 2 基 集石 1 基 溝状遺構 55 条 ピット 10 基 焼土跡 1 基	土器（前期・中期） 石器 礫 陶磁器 ガラス製品 煉瓦	仙川上流域における 縄文時代遺構の検出 宝永火山灰を含む溝 の検出、村境界道に 関連する遺構の検出、 近世の土地利用状況		
要約	<p>本遺跡は武藏野台地の武藏野面上、仙川の源流域に立地し、小金井市本町四丁目 7 番地内、東京都住宅供給公社小金井本町住宅敷地内に所在する。調査地点は仙川の谷間にあたる。仙川は多摩川の名残川で、約 2 万 6 千年～ 2 万 2 千年前には水量が減少し、谷の埋積が始まった。埋積が進んだ以降も、地下水等による長期的な水の影響を受けており、比較的低温な環境であったと推測される。</p> <p>本調査では縄文時代の土坑や集石、土器、石器と、近世および近代の溝状遺構、ピット、陶磁器類などが確認された。縄文時代の遺物は全て同層位から検出され、縄文時代前期後半（諸磯 c 式）と中期後葉（加曾利 E 式）の異なる土器がまとまって出土したことから、遺物は谷上から二次堆積によってもたらされた可能性が高い。よって谷上の縁辺部や平坦部にも遺跡範囲が広がることが推測される。</p> <p>近世および近代の遺構については、大半が畝間溝で、一部に旧道に関連する溝状遺構が確認された。畝間溝の一部からは宝永 4 年（1707）の富士山噴火の際の火山灰が検出され、元禄 9 年（1696）頃の小金井村分水の設置後、間もなく耕作地として使用されていたことが分かった。また明治 8 年（1875）「貫井村全図」記載の「小金井村境界通」に平行・隣接する溝も検出され、区画溝や境堀など、村境あるいは境界道に関連する遺構と思われる。</p>						

印刷仕様		
表紙	レザック	215kg (四六判)
見返し	上質紙	135kg (四六判)
本文	マットコート紙	90kg (四六判)
写真図版	マットコート紙	90kg (四六判)
印刷方式	オフセット印刷	
使用インク	エコマーク商品認定基準に適合	
製版線数	150 線 (カラー 175 線)	
本書は永久保存を考慮し、すべて中性紙を使用		

小金井市

No.22 遺跡

—小金井本町住宅建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

東京都埋蔵文化財センター調査報告 第378集

2023年9月29日 発行

編集・発行 公益財団法人 東京都教育支援機構
 東京都埋蔵文化財センター
 東京都多摩市落合一丁目14番2
 TEL 042-374-8044

印刷 株式会社 外為印刷
 東京都台東区浅草二丁目28番31号

